文化庁委託事業報告書

東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究3

2025年2月

東北大学大学院文学研究科
東北大学方言研究センター



ま え が き

本書は、2024（令和 6）年度の文化庁委託事業「東日本大震災被災地方言の記録作成及び啓発事業」の宮城県の事業の報告書です。

東北大学方言研究センターでは、震災発生直後から、被災地の方言をめぐるさまざまな問題に取り組んできました。その活動については、すでに次の 13 点の報告書に述べています。

『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』（2011 年度文化庁委託事業報告書）

『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（宮城県）』（2012 年度文化庁委託事業報告書）

『被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開 1～4』（2013～2016 年度文化庁委託事業報告書）

『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 1 ～5』（2017～2021 年度文化庁委託事業報告書）

『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 1～2』（2022～2023 年度文化庁委託事業報告書）

今年度は、文化庁の事業の委託を受け、気仙沼市における日常会話を踏まえた方言の記述と、名取市の方言による市民活動の記録と継承に取り組みました。

今回もまた、現地の方々にはひとかたならぬお世話になりました。特に、話者のみなさまには地元の方言についていろいろと教えていただいたり、方言による社会活動をめぐるインタビューやアンケートにご協力いただいたりしました。また、気仙沼市における調査では、このたびも気仙沼市教育委員会生涯学習課の手厚いご支援をいただくことができました。また、気仙沼市の高校生への調査では、学校法人東陵学園東陵高等学校に、会場の提供から協力者の手配、依頼まで全面的にお世話になりました。名取市における方言による社会活動の記録と継承では、「方言を語り残そう会」（代表：伊藤恵子氏）、名取市市役所市民協働課、元美田園第一仮設住宅会長高橋善夫氏の全面的なご協力を得るとともに、大阪教育大学の櫛引祐希子先生にすべての面倒を見ていただくことができました。お世話になったみなさま方に心より感謝申し上げます。

本年 3 月 11 日には、東日本大震災の発生から 14 年となります。インフラなど物質文化の復興はある程度進みましたが、精神文化の復興はどうでしょうか。私たちは、被災地の復興にとって、心のよりどころとなる方言こそ重要な役割を担うはずだと考えています。私たちのこの取り組みが、被災地の“ふるさと”の再生に寄与できることを願っています。また、この報告書が多くの方々の目にとまり、被災地の方言の将来について考えるひとつのきっかけとなることを期待します。

それにしても、こうした文化庁の事業はたいへん貴重です。方言は地域の文化の根底にあるにもかかわらず、被災地の方言についての取り組みは途に就いたばかりといってよい状態です。いまだに多くの地域の方言が、保存・継承の取り組みを必要としています。文化庁には、今後もこうした活動への支援を期待したいと思います。

2025 年 1 月 26 日

東北大学大学院文学研究科・東北大学方言研究センター准教授
中　西　　太　郎

【事業の概要】

1. 事業の目的

2024（令和6）年度の文化庁委託事業「東日本大震災被災地方言の記録作成及び啓発事業」において、宮城県では、以下の2つの目的意識で取り組みを行うことにした。

(1) 被災地方言の保存・継承のためには、その基盤として、専門的な視点に立つ方言の記録作業が不可欠である。また、それらの成果を学界だけでなく一般市民にも公開することで、方言への関心を醸成することも必要となる。そのような趣旨に基づき、被災地の方言を記録し公開する企画を行う。

(2) 方言の継承のためには、地域の市民たちが行っている取り組みについて、その成果と課題を明らかにし、今後の活動に生かすことが必要となる。そこで、宮城県名取市の「方言を語り残そう会」及びその社会活動に関わる関係者を対象に、活動の今までの成果と方言の保存・継承まで見据えたときの課題を浮き彫りにすることで、市民が行う方言による社会活動の在り方を考察するための調査分析を行う。

本書は、これらの事業成果を収めた報告書である。

2. 企画の概要

(1) 宮城県気仙沼市方言における方言の記録と公開（本書第1部）

宮城県気仙沼市において、これまで東北大学方言研究センターが取り組んできた日常会話の収録作業を踏まえ、伝統的方言の記述を行う。これまで、さまざまな言語分野の記述が行われてきたが、今回はこれまでの分野に加え、方言の記録が著しく遅れており、かつ、被災地である東北地方の言語生活に重要な位置を占める感動詞やオノマトペ、言語行動、さらに、社会の中における方言の様相などを捉える記述に取り組む。

(2) 宮城県名取市の市民団体が取り組む方言による社会活動に関する記録と継承（本書第2部）

東日本大震災以降、被災地の方言の活性化に取り組んできた「方言を語り残そう会」の社会活動（被災者支援や特殊詐欺防止の啓蒙活動など）を、会員だけでなく、「方言を語り残そう会」と関わりが深い第三者（元仮設住宅会長と市役所関係者）の目線からも捉え直し、方言による社会活動の社会的意義と課題について考えるための調査分析を行う。

3. 実施体制

代表者　中西太郎（東北大学大学院文学研究科准教授）
協力者　小林隆（東北大学名誉教授）
櫛引祐希子（大阪教育大学准教授）
伊藤恵子（名取市方言を語り残そう会代表）

４．協力機関・協力者

気仙沼市教育委員会生涯学習課

名取市市民協働課　浅野美保子氏　佐藤理恵氏

気仙沼市学校法人東陵学園東陵高等学校

方言を語り残そう会（名取市）

高橋善夫氏（元美田園第一仮設住宅自治会長）

2024（令和 6）年度文化庁委託事業報告書
「東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 3」

目　　次

まえがき（1p）

事業の概要（2p）

第 1 部　宮城県気仙沼市方言の調査報告

調査の概要……中西　太郎　8

音韻・アクセント……小林　　隆 12

気づかない方言・新しい方言・用法が変化する伝統的方言……武田　　拓 20

頭痛を表すオノマトペ……赤間　咲良 28

推量表現の形式（ベ類／ベオン類／ゴッテ類）……竹田　晃子 35

終助詞ゴド……玉懸　　元 41

「（サ）セテモラウ」への意識……加順　咲帆 49

感動詞「アップ」……坂喜　美佳 56

感動詞「ナンダベ」の形態・音調的特徴……勝又　琴那 64

あいさつ表現の変化……中西　太郎 72

子どもに対する就寝の働きかけの言語行動……椎名　渉子 80

方言イメージ……佐藤未依奈 88

外国人に対する方言意識……櫛引祐希子 95

医療現場の方言使用 ..... 山田はるか 103

第 2 部　名取市における方言による社会活動の記録と継承 ..... 櫛引祐希子 111

あとがきーこれからの被災地方言の記録に求められることー

第1部

宮城県気仙沼市方言の調査報告

調査の概要

中西　太郎

1　調査の目的

東北大学方言研究センターでは、学生たちが主体となって東日本大震災と方言をめぐる取り組みを行っている。被災地の方言会話を収録した会話集とCDの作成、インターネットを通じての公開はその成果のひとつである。被災地の方言を会話資料のかたちで残そうという取り組みは、13年前に始まった。その成果はこれまで次に上げる会話集としてまとめてきた。

『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集－宮城県沿岸15市町－』（2012年度）
『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話－』（2013年度）
『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話2－』（2014年度）
『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話3－』（2015年度）
『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の100場面会話4－』（2016年度）

※いずれも、「東日本大震災と方言ネット」（https://www.sinsaihougen.jp/）で公開。

これらの取り組みの特徴は、地域の言語生活、すなわち、そこに暮らす人々の、言葉による生活の様子を、生き生きとしたかたちで後世に伝える記録を作りたいと考えた点にある。

そして、2017年度からは以上のような方言会話資料を分析し、その結果を補完・発展させるための臨地面接調査を実施する段階に進んだ。方言の継承に向けた基礎作業としては、地域の実際の会話を記録することが必要であると同時に、その方言の言語としての特徴を分析的に把握することも重要である。そこで、そうした課題の実践に取り組み、その成果を次の報告書にまとめた。

『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開』（2017年度）
『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 2』（2018年度）
『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 3』（2019年度）
『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 4』（2020年度）
『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 5』（2021年度）
『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究』（2022年度）
『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2』（2023年度）

※「東日本大震災と方言ネット」（https://www.sinsaihougen.jp/）で『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 1～3』、『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2』を公開。以降も今後公開していく予定である。

今年度は、こうした取り組みを継続することとした。

2　調査地域とテーマ

今年度の調査地域は宮城県気仙沼市である。これまで同市で行った臨地面接調査、オンライン調査などの記述的調査の結果を踏まえ、世代別の多人数調査を実施することで、方言の使用実態の世代差や変化の動態を捉えることを目的とした。調査テーマについては、音韻、アクセント、語彙、文法などの従来の方言学で扱われてきた分野に加え、方言の記録が著しく遅れており、かつ、被災地である東北地方の言語生活に重要な位置を占める感動詞やオノマトペ、言語行動、談話などの分野や、社会の中における方言の様相などを捉える分野を対象とした。具体的に何をテーマとするかは、担当者それぞれの興味に従うことにした。なお、今回は、世代別の実態を解明するため、1 テーマあたりの被調査者数を多く確保する方針で 1 テーマ 5 分程度の調査時間で調査項目を設計し、それらを組み合わせた統一調査票を作成して調査を行った。

今回調査を行った具体的なテーマを以下に示す（[　] 内は企画者名、敬称略）。

○語彙
- ・気づかない方言・新しい方言・用法が変化する伝統的方言［武田拓］

○感動詞
- ・感動詞「ナンダベ」［勝又琴那］
- ・感動詞（子どもを叱るとき）［坂喜美佳］

○音韻・アクセント
- ・音韻・アクセント［小林隆］
- ・オノマトペの音韻［工藤真子］

○文法
- ・終助詞「ゴド」・格助詞相当形式「ンドゴ」［玉懸元］
- ・時間表現（テンス・アスペクト）［津田智史］
- ・推量表現（「ベ」類・「ベオン」類・「ゴデァ」類）［竹田晃子］

○言語行動
- ・配慮の言語行動［加順咲帆］
- ・あいさつ［中西太郎］

○談話
- ・昔話の結末句［甲田直美］

●オノマトペ
- ・頭痛を表すオノマトペ［赤間咲良］

●文法
- ・動詞の活用（推量表現の接続）［田附敏尚］

●言語行動
- ・「おどす」「甘やかす」言語行動［椎名渉子］

●社会の中における方言の様相

・方言イメージ［佐藤未依奈］

・医療現場の方言［山田はるか］

・非母語話者への方言使用意識［櫛引祐希子］

○は面接調査、●はアンケート調査

1話者当たり60分の調査時間であったため、面接調査で12項目、アンケートで6項目を調査することにした。なお、アンケートは、面接調査後に話者にお渡しし、自記式で記入して後日返送してもらう形をとった。

3　調査の担当者

上にテーマごとの担当者を示したが、その所属等は次のようになっている（敬称略）。

教員：中西太郎（東北大学、調査責任者）、甲田直美（東北大学）、小林隆（東北大学名誉教授）、武田拓（仙台高等専門学校）、竹田晃子（岩手大学）、玉懸元（聖徳大学）、櫛引祐希子（大阪教育大学）、田附敏尚（神戸松蔭女学院大学）、椎名渉子（名古屋市立大学）、津田智史（宮城教育大学）、坂喜美佳（山形大学）

大学院生：工藤真子、加順咲帆、勝又琴那、赤間咲良、佐藤未依奈、山田はるか、宋歌、王純、周禧龍、田形周造、對馬晴琉、中川葉月

学部生：阿部愛未、安藤春花、角田航平、欠端萌々、鈴木舞優、原拓也、百束綾乃、丸岡凜香、水谷亮翔、山中蒼吾

以上のように、東北大学文学研究科日本語学研究室の大学院生・学部生を中心に、学外の研究者も参加して調査を企画・実施した。特に幹事・副幹事が全体を統括し、調査を導いた。今年度の幹事・副幹事は次のとおりである。

幹事：加順咲帆、勝又琴那

副幹事：赤間咲良、佐藤未依奈、山田はるか

4　調査の方法

調査は上にも述べたように臨地面接調査の方式で行った。具体的なことは次のとおりである。

調査時期：2024年8月7日～8月10日

調査場所：気仙沼市民会館、気仙沼市教育委員会、東陵高等学校

話者：高年層（60代以上）　22名［男性11名 女性11名］

中年層（40～50代）　20名［男性 5名 女性15名］

若年層（20～30代）　21名［男性 8名 女性13名］

少年層（10代）　20名［男性10名 女性10名］

調査協力機関：気仙沼市教育委員会生涯学習課（幡野寛治氏、鈴木志穂氏）
気仙沼市民会館（小松三喜夫館長）
学校法人東陵学園東陵高等学校（教頭 野村美奈先生）

調査の実施にあたっては、話者の推薦から日程の調整、調査会場の確保に至るまで、気仙沼市教育委員会生涯学習課から多大なご支援をいただくことができた。また、気仙沼市民会館には調査会場の借用等でたいへんお世話になった。東陵高等学校にも、話者の推薦から日程の調整、調査会場の確保など、準備から実施段階まであらゆる面でご支援をいただいた。そして、話者の方々、東陵高等学校の生徒及び関係者の皆さんには、ご多忙の中、会場まで足を運んで調査に応じていただいた。これらの方々のご協力なくしては、この調査は実現しなかったと言ってよい。ここにあらためてお礼を申し上げ、感謝の意を表する次第である。

5　報告書作成の過程、関連する成果報告、調査

この報告書は、各テーマの担当者が執筆を行ったものである。ただし、調査項目全てをまとめきることはできなかったので、それについては今後を期すことにした。

また、本報告をまとめる過程で、筆者が新たに参加した「東北大学災害科学コアリサーチクラスター災害人文学領域」の、能登半島地震の復興と支援をテーマにしたシンポジウムにおいて、今回の調査結果の一部を用いて、被災地の復興過程における方言の役割をテーマに以下の報告を行った。

中西太郎「地域文化としての方言と被災地の復興」（『災害人文学領域シンポジウム（2024 年度第 4 回研究会）東日本大震災・能登半島地震の復興と支援―宗教者と研究者の対話―』、於東北大学、2025 年 1 月 24 日）

なお、一連の成果報告のための費用は、令和 6 年度消滅の危機にある方言の記録作成及び啓発事業「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」から支援を受けている。

最後に、関連する調査として、気仙沼市方言については、先に述べた『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 1～5』『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 1～2』のほか、これまで次の調査報告を行っている。

小林隆編（2012）『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

この成果は、次の報告書の中にも収められている。

東北大学方言研究センター（2012）『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究（文化庁委託事業報告書）』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

今回の調査は、以上の内容を補完する位置付けにあるものと考えることもできる。合わせてご覧いただくことを期待したい。

音韻・アクセント

小林　隆

1　調査の目的

今回の調査の目的は、世代別多人数調査によって、気仙沼市方言の音韻とアクセントの現状を明らかにすることにある。少し具体的に調査のねらいを記せば、次のようになる。

(1) 気仙沼市方言の動態について

気仙沼市方言の伝統的な音韻やアクセントの特徴が、どのように保持され、また、失われてきているか。高年層には気仙沼市方言の特徴が、少年層には共通語的な特徴が観察されると見込まれるが、その間の実際の変化はどのような様相を示すか。

(2) 気仙沼市方言の発音能力について

年代が下がるにつれて共通語化が進行していると予想されるものの、若い世代は気仙沼市方言の発音を完全に失ったのだろうか。そうではなく、若い世代も潜在的な発音能力は保持しており、話そうと思えば発音が可能な状況にあるのか。

(1)は気仙沼市方言の発音面の移り変わりについて知ろうとするものである。世代別多人数調査という今回の気仙沼市調査全体に共通する目的といってよい。同様の趣旨で 2006 年度に行われた前回調査の結果（大橋 2012、佐藤 2012）との比較にも触れてみたい。

(2)は「方言発話能力」（実際の使用のいかんにかかわらず話せる能力）という概念を提案し、発音面について気仙沼市の現状がどうであるかを知ろうとするものである。言語変化の過程には、ふだんはそのように言わないが、能力としてはそれを実現できる段階があると想定される。言語変化の過程に生じるそのような段階が、現在の気仙沼市方言の発音面に見られないか、探ってみたい。なお、佐藤（2012）では「共通語発話能力」とでも呼ぶべきものが調査されているが、一般に共通語化の進行が著しい今日、逆に、方言の発話能力を調べることも意義が大きいと考えた。

2　調査の方法

今回の調査は、音韻・アクセント以外の内容も含めて全体で統一的な調査票を用意して行うものであり、調査票の分量と調査時間に厳密な制限があった。そこで、音韻については、前回調査の大橋（2012）および昨年度調査の小林（2024）から世代差の存在が予想されるカ行・タ行子音の有声化とガ行子音の鼻音化にテーマを限定した。また、アクセントについては、前回調査の佐藤（2012）を参考に、今回は 2 拍名詞に絞り、「類別語彙」による型の区別を見ることにした。なお、調査時間節約のために、調査語は音韻とアクセントの特徴の両方を同時に観察できるものを選定した。

調査は、該当の単語を冒頭に置いた文を話者に見せながら、それを発音してもらう方式をとった。

以下にその調査文を掲げる。下線の単語が対象であり、音韻は2拍目子音の音声を観察した。

〈調査文〉		〈音韻注目点〉	〈アクセントの類〉
① 雪（ゆき）	降った	カ行子音	2類
② 桶（おけ）	壊れた	カ行子音	5類
③ 酒（さけ）	飲んだ	カ行子音	1類
④ 坂（さか）	登った	カ行子音	3類
⑤ 靴（くつ）	脱げた	タ行子音	3類
⑥ 糸（いと）	切れた	タ行子音	4類
⑦ 歌（うた）	歌った	タ行子音	2類
⑧ 旗（はた）	振った	タ行子音	2類
⑨ 麦（むぎ）	植えた	ガ行子音	4類
⑩ 髭（ひげ）	生えた	ガ行子音	1類
⑪ 陰（かげ）	できた	ガ行子音	5類
⑫ 毬（いが）	踏んだ	ガ行子音	2類

また、調査の目的のひとつである気仙沼市方言の発音能力について見るために、「通常スタイル」と「方言スタイル」の2つに分けて発話してもらった。「通常スタイル」は、話者が日常的に話す場合の発音であり、「方言スタイル」は、特に、気仙沼市方言らしさを意識して話す場合の発音である。

具体的に言うと、話者に対しては、まず前提として、「ふだん、親しい知り合いの人と話すときの発音」を聞かせてほしいと述べた上で、次のように2つのスタイルでの発話を指示した。

a. 通常スタイル：（調査文提示シートを見せながら）まず、次の言葉をふだんの言い方で発音してみてください。読み上げるのではなく、話すように自然な感じでお願いします。

b. 方言スタイル：（調査文提示シートの最初に戻り）それでは、今度は、気仙沼弁らしくうんと訛って発音してみてください。（以下、「わからない」と言われたら）どのように訛ったらよいかわからない場合でも、【話者名】さんのイメージする気仙沼弁の発音でやってみてください。

bの調査では、あえて「うんと訛って」のような一般人にとってわかりやすい表現を使うことで、話者が「方言スタイル」に入り込みやすいようにした。

このように、調査上、2つの発話スタイルを設定したが、高年層においては両者が一致することが予想される。一方、若い世代では、「通常スタイル」に共通語的な傾向が現れるのに対し、「方言スタイル」では気仙沼市方言の特徴が出現する可能性が考えられる。

3　音韻

表1に音韻調査の結果を掲げた。縦軸に話者を生年の早い順に並べてある。「1933」「1938」などの4桁の数字が話者の生まれ年であり、同じ年の場合は、表には載せていないものの生年月日の「月日」まで考慮して早い順に配列した。一方、横軸には調査語を注目点ごとにまとめて配置した。また、表の左側に「通常スタイル」の結果を、右側に「方言スタイル」の結果を表示してある。

表１　音韻調査結果

△　有声化
●　鼻音化
－　特徴なし
／　調査不備

発話スタイル		通常スタイル												方言スタイル											
語		カ行子音				タ行子音				ガ行子音				カ行子音				タ行子音				ガ行子音			
話者		雪	桶	酒	坂	靴	糸	歌	旗	麦	髭	陰	毬	雪	桶	酒	坂	靴	糸	歌	旗	麦	髭	陰	毬
高年層	1933	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1938	△	△	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	／	△	－	△	△	△	●	●	●	●
	1938	△	△	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	－	△	△	△	●	●	●	●
	1944	△	－	△	△	－	－	－	△	●	●	●	●	△	－	／	△	－	－	／	－	●	●	●	●
	1944	△	△	△	△	－	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1947	－	－	－	－	△	△	△	－	●	●	●	●	－	△	－	－	△	△	△	－	●	●	●	●
	1947	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1948	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	／	△	●	●	●	●
	1948	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1949	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1949	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	－	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1949	－	－	△	△	△	△	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1951	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1951	△	△	△	△	△	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1951	－	－	－	△	△	－	－	－	●	●	●	●	－	△	△	△	△	－	△	△	●	●	●	●
	1953	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1954	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1955	－	△	－	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1957	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1957	－	－	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1957	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1959	－	△	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	－	－	－	△	●	●	●	●
中年層	1965	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1965	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1966	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	－	△	－	－	－	－	－	●	●	●	●
	1966	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1966	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1968	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	－	－	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1969	△	△	△	△	－	△	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	△	－	－	－	－
	1969	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1969	－	－	－	－	－	－	－	－	●	－	●	●	△	－	－	－	－	－	－	△	●	●	●	●
	1969	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1973	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	－	－	△	●	●	●	●
	1974	△	△	／	△	－	△	／	△	●	●	●	●	△	△	／	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1976	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1976	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1977	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	－	△	△	△	●	●	●	●
	1977	－	－	－	△	－	－	－	△	●	●	●	●	△	－	－	△	△	－	－	△	●	●	●	●
	1978	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	－	－	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1982	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1982	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1984	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
若年層	1985	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	－	△	△	△	－	△	△	△	●	●	●	●
	1985	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	－	－	－	－	－	－	－	△	●	●	●	●
	1985	－	△	－	－	－	－	△	△	●	●	●	●	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●
	1985	－	－	－	－	－	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	－
	1986	－	－	－	－	－	－	－	－	●	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1986	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	1986	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1987	△	△	△	－	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	－	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1987	－	－	△	△	△	－	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	－	－	△	●	●	●	●
	1988	－	－	－	－	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1990	△	△	△	△	△	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1992	△	－	△	－	－	－	－	－	●	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	△	－	－	－	－
	1993	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1994	－	－	－	－	－	－	△	△	●	●	●	●	△	－	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	1994	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	－	－	－	－	－	△	△	△	●	●	●	●
	1995	－	－	△	－	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	－	△	△	△	△	●	●	●	●
	1995	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	△	△	△	△	－	－	－	－
	1999	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●	△	△	△	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	2000	－	－	－	－	－	－	－	－	●	－	－	－	△	△	－	△	△	△	△	△	●	－	－	－
	2002	△	－	－	－	－	△	－	△	－	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	／	－	－	－	－
	2002	△	－	－	△	－	－	△	－	●	●	●	●	△	△	－	－	－	△	△	△	●	●	●	●
少年層	2006	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	2006	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	－	△	△	△	－	－	－	－
	2007	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	△	△	－	－	△	－	－	－	－	－
	2007	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	－
	2007	△	△	－	－	－	△	－	△	●	●	●	●	－	－	－	△	△	△	△	△	●	●	●	●
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	△	△	－	－	△	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	－	△	△	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●	－	－	－	－	－	－	－	－	●	●	●	●
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	－	－	－	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	－	－	△	△	△	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	△	△	－	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	－	△	－	△	△	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	－	－	－	－	△	△	△	－	－	－	－
	2008	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	△	△	△	△	△	△	△	△	－	－	－	－

音声的特徴は、有声化の特徴が見られた場合は「△」を、鼻音化の特徴が見られた場合は「●」を示し、そのいずれも見られない場合は「－」とした。「／」は調査不備で適切な回答が得られなかった部分である。言い直しにより複数回の発話が得られ、しかも、異なった特徴が現れた場合が稀にあったが、その場合は言い直した方の発音を採用することにした。

なお、音声の判定においては、有声化・鼻音化の有無を厳密に聞き分けることが難しいこともあった。有声化について言えば、[k̬] [t̬]のような無声音と有声音の中間的な発音がなされる場合もあったが、今回、それらは有声化の特徴が見られるものとして処理した。また、鼻音化については、やや鼻にかかっているような微弱な鼻濁音も鼻音化の特徴を有しているものとして処理した。概して、判断に迷う発音は、高年層と少年層の中間の世代に聞かれることがあったと言える。

3.1 カ行・タ行子音の有声化

まず、カ行・タ行子音の有声化について検討しよう。先に**表１**の左側、「通常スタイル」を見ると、有声化を示す「△」の記号は高年層に多く、年代が下がるにつれてその数が減少していくことがわかる。少年層では「△」はほとんどなくなってしまう。これは有声化の特徴が高年層から若い世代に向けて失われていき、少年層ではそれがほぼ消えてしまったことを意味する。ただし、個人差もかなりあり、高年層の中にも有声化の特徴を示さない、「－」記号が並ぶ話者も見られる。

それでは、「方言スタイル」ではどうか。表の右側を見ると、「△」の割合は明らかに「通常スタイル」より多いように見える。「通常スタイル」では「－」だった話者も「方言スタイル」では「△」になっている場合も見られる。特に、少年層においては、「通常スタイル」ではほとんど有声化しなかったにもかかわらず、「方言スタイル」ではその特徴を示す話者が増えている。

次に、世代によってどの程度有声化するか、その推移をグラフによって把握してみよう。**図１**は話者ごとのカ行・タ行子音の有声化の度合いをグラフ化したものである。横軸に話者を生年の順に左から右に向けて配置し、縦軸には話者ごとの「△」の数を数え、最高８得点として表示した（調査不備の「／」は有声化として得点化した）。棒グラフは「通常スタイル」の結果を、折れ線グラフは「方言スタイル」の結果を表している。なお、全体としてカ行子音とタ行子音とで、有声化の度

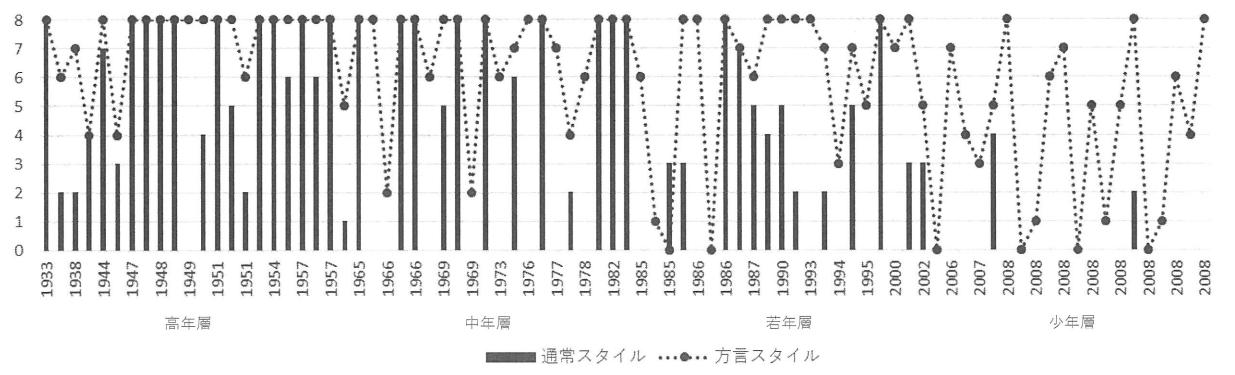


図１　カ行・タ行子音の有声化の度合い

合いに差がなかったので、ここでは両者を合わせて扱っている。

まず、「通常スタイル」の棒グラフを見ると、有声化の特徴が 70 年余りの間に衰退していく様子があらためて把握できる。特に、中年層から若年層にかけては、棒グラフが立つ箇所と立たない箇所がまだらに現れ、有声化する話者としない話者とが混在している様子が目に入る。衰退の過渡期に個人差が大きく現れることも、カ行・タ行子音の有声化の変化の重要な特徴と言ってよい。

次に、「方言スタイル」の折れ線グラフを見ると、ほとんどの話者において「通常スタイル」の棒グラフの数値を上回っていることがわかる。これは、両スタイルの切り替えが可能であり、「方言スタイル」では有声化の特徴を相当に実現できる話者が多いことを示す。とりわけ少年層では、「通常スタイル」との差が顕著であり、ふだんはそのような発音はしないものの、潜在的な「方言発話能力」を保持していて、実現しようと思えばできる話者がかなりいることを意味する。

3.2 ガ行子音の鼻音化

次に、ガ行子音の鼻音化について取り上げる。あらためて**表 1** を見ると、「●」を付けた鼻音化の特徴は高年層・中年層では完全に保たれているが、若年層ではやや衰退が始まり、特に 2000 年以降に生まれた話者になると、一気に消えてしまっている。こうした急激な変化は、上で見た有声化の変化が漸移的であったのとはかなり異なるものと言える。また、「通常スタイル」と「方言スタイル」でほとんど違いが現れないことも注目すべき点である。

それらの特徴は、**表 1** から十分読み取れるが、一応、**図 1** に合わせたグラフも**図 2** として作成してみた。**図 2** が示す様相は、ほぼ完全（4 点）かゼロ（0 点）かのどちらかであり、その変化が若年層から少年層に移るあたりで一気に起こったことを示している。「通常スタイル」と「方言スタイル」のグラフもほぼ一致しており、有声化のような、若い世代での潜在的な「方言発話能力」を示す兆候は見当たらない。「方言スタイル」の発話の際、「濁点を付ければいいですか」と聞いてきた話者がいたことが示すように、若い世代でも、有声化の特徴は意識されており、意図的な切り替えが可能であるのに対して、鼻音化の特徴は無意識的なものであり、そうしたコントロールが効かないことが背景にあるのではないかと考えられる。

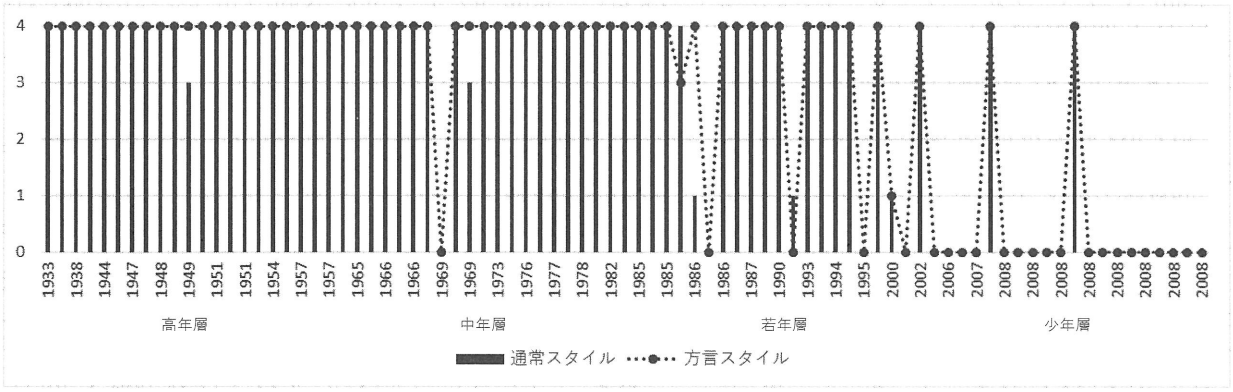


図 2　ガ行子音の鼻音化の度合い

表2　アクセント調査結果

発話スタイル		通常スタイル												方言スタイル											
類		1		2				3		4		5		1		2				3		4		5	
話者	語	酒	髪	雪	旗	毬	歌	坂	靴	糸	麦	陰	桶	酒	髪	雪	旗	毬	歌	坂	靴	糸	麦	陰	桶
高年層	1933	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1938	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	／	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1938	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1944	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	／	△	△	△	△	／	−	−	−	−	−	−
	1944	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1947	△	△	△	−	−	−	−	−	−	△	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1947	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1948	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	／	−	−	−	−	−	−
	1948	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1949	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1949	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	△	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1949	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1951	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1951	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1953	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1954	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1955	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1957	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1957	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1957	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1959	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
中年層	1965	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1965	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	△	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1966	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1966	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1966	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1968	△	△	−	−	−	−	●	−	●	●	●	●	△	△	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1969	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1969	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1969	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1969	△	△	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1973	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	−	△	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1974	／	△	△	−	−	／	−	−	−	−	−	−	／	△	△	−	△	−	−	−	−	−	−	−
	1976	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1976	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1977	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	●	●	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1977	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	●	●	△	△	−	−	−	−	−	−	−	●	●	−
	1978	△	△	−	−	−	−	−	−	−	●	●	●	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1982	△	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	●	△	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	●
	1982	△	△	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1984	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
若年層	1985	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	−	●	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1985	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	−
	1985	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	●	●	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1985	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1986	△	△	△	△	−	−	−	−	−	●	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1986	−	△	−	△	−	−	−	−	●	●	●	●	−	△	−	△	−	−	−	−	●	●	●	−
	1986	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1987	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1987	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1988	△	△	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−
	1990	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1992	△	△	−	−	△	−	−	−	●	●	●	−	△	△	△	−	△	−	−	−	−	●	●	−
	1993	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	●	−	△	△	−	−	△	−	−	−	−	−	−	−
	1994	△	△	△	△	−	−	−	−	●	●	●	●	△	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	●
	1994	△	△	−	−	−	−	−	−	●	−	●	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1995	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	1995	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	●	●	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	1999	△	△	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2000	△	△	−	−	△	−	−	−	−	●	●	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2002	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	●	△	△	△	／	−	−	−	−	−	−	−	−
	2002	△	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	−
少年層	2006	△	△	△	△	●	−	−	−	●	●	●	−	●	△	−	−	△	−	−	−	●	△	●	●
	2006	△	△	△	△	−	−	−	−	●	●	●	●	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2007	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	●	−	△	△	△	−	−	−	−	−	●	−	−	−
	2007	△	△	△	−	●	−	−	−	●	●	●	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	●	●	●
	2007	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2008	△	△	−	−	●	−	−	−	●	●	●	●	△	−	−	−	●	−	−	−	●	−	−	●
	2008	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	●	−	△	△	△	−	●	−	−	−	●	●	●	−
	2008	△	△	△	−	●	−	−	−	●	●	●	●	−	△	△	−	●	−	−	−	●	●	●	●
	2008	△	△	△	−	●	−	−	−	●	●	●	−	△	△	△	−	●	−	−	−	●	●	−	−
	2008	△	△	−	−	△	−	−	−	●	●	●	△	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2008	△	△	△	△	−	−	−	−	−	△	−	−	△	△	−	△	−	−	−	−	△	●	●	−
	2008	△	△	−	−	●	−	−	−	●	●	●	−	△	△	−	−	−	−	−	−	●	−	●	−
	2008	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	●	−	△	△	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−
	2008	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	−	△	△	△	△	−	−	△	−	−	△	−	−
	2008	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	−	−	△	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	−
	2008	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	−	−	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	−	−
	2008	△	△	−	−	−	−	−	−	●	−	−	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2008	△	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	●	−
	2008	△	△	−	−	●	−	−	−	●	●	●	●	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	2008	△	△	△	−	−	−	−	−	●	●	／	●	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−
共通語ア		△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	●	●	△	△	−	−	−	−	−	−	●	●	●	●

△　平板型
−　尾高型
●　頭高型
／　調査不備

4　アクセント

表 2 はアクセント調査の結果である。表の構造は**表 1** と同じであり、記号は「△」が平板型、「－」が尾高型、「●」が頭高型を示す。表の最後に、共通語アクセントの型を示しておいた。

実際の音相について述べると、平板型の語は、後ろに続く動詞との関係で 2 拍目が高くなることもあるが、基本的には平らに発音される。尾高型の語は 2 拍目が高く、その後ろで下がる音相を取る。平板型は動詞へそのまま続いていくのに対して、尾高型は後ろの動詞が高く始まる場合でも、そこでいったん休止する印象があり、区別が可能である。頭高型は 1 拍目が高く、2 拍目が低い。

さて、**表 2** の高年層、特に 1930 年代生まれの話者の様子から、気仙沼市方言の伝統的なアクセント（気仙沼アクセント）には、次のような区別があったことがわかる（4・5 類の 2 拍目母音の広狭が影響しないことは佐藤 2012 の指摘するとおりである）。

平板型（△）：1 類（酒、髭）・2 類（雪、旗、毬）
尾高型（－）：2 類（歌）・3 類（坂、靴）・4 類（糸、麦）・5 類（陰、桶）

一方、共通語アクセントは、表の下部に示すとおり、次のような区別を持つ。

平板型（△）：1 類（酒、髭）
尾高型（－）：2 類（雪、旗、毬、歌）・3 類（坂、靴）
頭高型（●）：4 類（糸、麦）・5 類（陰、桶）

以上の 2 つのタイプを旧と新の両端に置くと、**表 2** から浮かび上がる動態は、気仙沼アクセントが、しだいに共通語アクセントに移行していく姿であると言える。高年層は、気仙沼アクセントを保つ話者が多いものの、2 類の「毬」が尾高型（－）になる話者もおり、中年層になると、その傾向は 2 類の語全体に広がる。また、4・5 類が頭高型（●）になる話者も現れてくる。この状態は若年層でも同様であるが、頭高型を示す話者はさらに増え、少年層になると、4・5 類の主流は頭高型に置き換わっていく。少年層の「毬」が頭高型に現れることがあるのは、栗の毬自体になじみが薄いためかもしれず、全体として、いずれ共通語と同じパターンへと収斂していくことが予想される。

「通常スタイル」と「方言スタイル」を比較すると、両者は似たような傾向を示すものの、4・5 類で頭高型（共通語アクセント）を尾高型（気仙沼アクセント）へと切り替える話者が一定数いることがわかる。

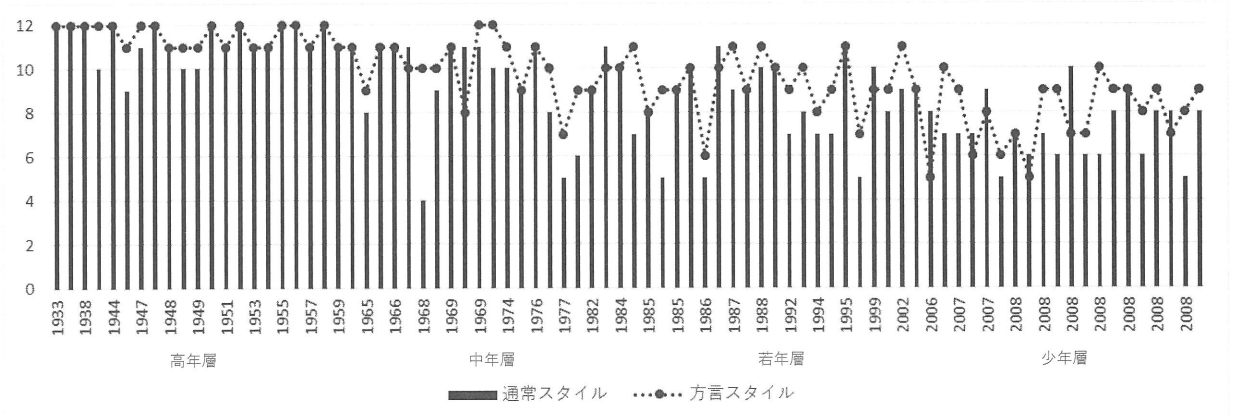


図 3　気仙沼アクセントとの一致度

ここで、音韻と同じ方式で、気仙沼アクセントとの一致度をグラフ化したものが**図 3** である。ここでは、12 語の一致度を単純に足し、最高で 12 点として計算している。この計算方法だと、全ての語を共通語アクセントで発音した場合でも 5 点となるので、その点は注意してほしい。

これを見ると、高年層、つまり 1950 年代生まれの話者たちまでは比較的安定して高得点を維持しているものの、中年層以降になると、全体的に右肩下がりのカーブを描き、伝統的なアクセントが衰退していく様子が読み取れる。共通語との一致度のグラフは載せないが、このカーブとはちょうど逆のパターンを示している。

「通常スタイル」の棒グラフと「方言スタイル」の折れ線グラフを比べると、ほとんどの話者において後者が前者を上回っている。特に、中年層以降の共通語化が進行しつつある世代でも、「方言スタイル」で気仙沼アクセントに近い発音を実現できる話者たちが多い。その場合、**表 2** に見られるように頭高型から尾高型への切り替えが顕著であるが、これは、気仙沼市方言においては語頭を高く発音することはないという意識を話者たちが持っているからかもしれない。

5　まとめ

今回の調査は、2006 年度実施の前回調査と 18 年間、すなわち、調査の世代区分で一世代に近い開きがあり、やはり一定の変化が認められる。音韻については、大橋（2012）の報告では有声化・鼻音化の特徴が少年層でもかなり保持されていたが、今回の少年層ではそれがほとんど消えている。

また、アクセントについては、調査方式の違いから厳密な比較が難しいものの、やはり佐藤（2012）の結果に比べて共通語化が進んできているように見える。佐藤の言う「方言的発話」は「ふだん話すときの発音」を想定したものであり、今回の調査の「通常発話」に近いものと考えられるが、そのときの少年層の結果は、今回の「方言スタイル」の結果に類似している。すなわち、18 年前の少年層はふだんの発話で気仙沼アクセントをある程度話していたが、現在では、方言を意識した発話でないと、それが難しくなってきているということになる。

しかし、今回の調査からは、項目にもよるものの、少年層においても潜在的な「方言発話能力」を持つ話者たちがいることが明らかになった。今後はそうした能力も失われ、完全な共通語化へと向かうことが予想されるが、現段階ではまだ方言的な発話が可能な話者が多い段階にあるとも言える。このことは、いわゆる方言教育の実施にとっても注目しておくべき事実であると思われる。

文　献

大橋純一（2012）「音韻」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

小林隆（2024）「音韻」東北大学方言研究センター編『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2』東北大学大学院文学研究科日本語学研究室

佐藤亮一（2012）「アクセント－気仙沼市－」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

気づかない方言・新しい方言・用法が変化する伝統的方言

武田　拓

1　調査の目的

今回の調査は、宮城県で使われている「気づかない方言」「新しい方言」「用法が変化する伝統的方言」のいくつかについて、気仙沼市での多人数調査を通して使用状況を把握することを目的とする。

2　調査の概略

話者は気仙沼市生え抜きの83名である。高年層22名（60歳以上の男性11名、女性11名）、中年層20名（40～59歳の男性5名、女性15名）、若年層21名（20～39歳の男性8名、女性13名）、少年層20名（高校生の男性10名、女性10名）の4つの年齢層に分ける。調査は対面による写真を併用した質問形式であり、回答は選択肢の中から選ぶものと自由回答のものとがある。昔からの友人とくつろいで話す場面を想定してもらった。

3　調査の結果

以下、調査した各項目について、集計結果をグラフ化し、若干の説明を付け加える。
図として示したグラフの見方について説明する。年齢層の右に付した数値は、その項目において集計対象とした人数である。例えば「高年層 22」とあれば、その調査項目において、高年層話者 22名全員を集計対象としたという意味である。「高年層 21」とあれば、その調査項目において、高年層話者22名のうち、調査不備等のため1名を除外し、21名を集計対象としたという意味である。また、1人の話者が複数の語形を回答できる項目（以下、「複数回答」と示す）については、横軸の数字はそれぞれの語形を回答した人数を示す。

(1)「ニーシーローヤートー」の続き（図1）

おはじきやコインなど、たくさんあるものを数えるとき、「ニー、シー、ロー、ヤー、トー」と2つずつ数え、まだ残っている場合、続けてどのように数えるかを尋ねた。宮城県内の他の地域で聞かれる「ニジューナレヤ」「ニジューカケロ」の、気仙沼での使用状況に着目した。複数回答である。

「ニジューカケロ」とは、2つずつ「ニー、ジュー、カー、ケー、ロー」と続け、さらに「サン、ジュー、カー、ケー、ロー」のように続ける数え方である。「ニジューナレヤ」は「ニジューカケロ」と同様で、「カー、ケー、ロー」の部分が「ナー、レー、ヤー」となる数え方である。「もう一度繰

り返す」は「ニー、シー、ロー、ヤー、トー」をそのまま何回も繰り返す数え方である。「その他」としてまとめた回答は、具体的には「ジューイチ、ジューニ、ジューサン」と１つずつ数える数え方や、「ニー、シー、ロー、ヤー、トー、ニジュー」、「ニー、シー、ロー、ヤー、トー、サンジュー」と続ける、あるいは「ニー、シー、ロー、ヤー、ニジュー」、「ニー、シー、ロー、ヤー、サン」と続ける、というものである。気仙沼では「ニジューカケロ」が優勢であるが、世代が下がるにつれて、使用するという人数が減っている。

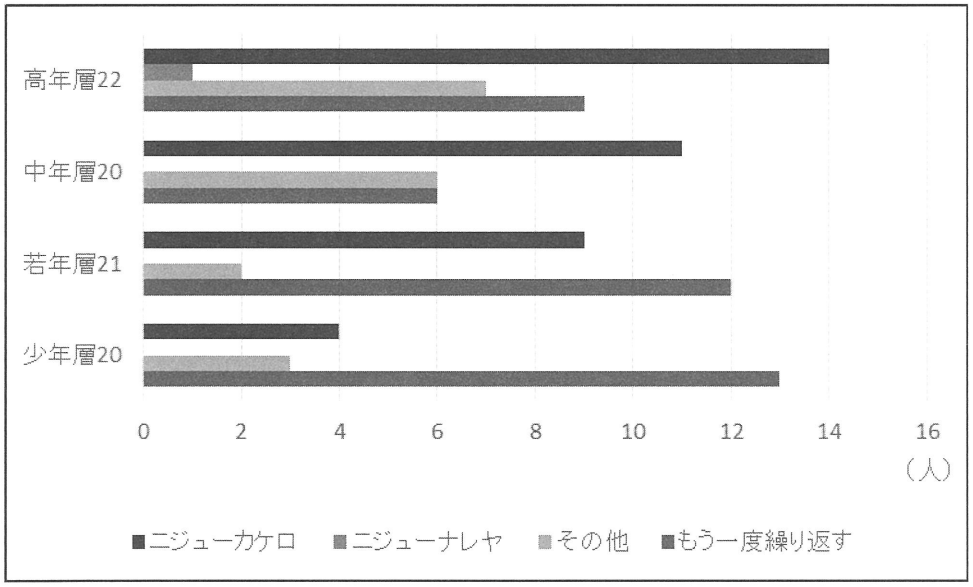


図１　２つずつ数えるときの言い方（現在）

(2)「イズイ」の意味（図 2.3）

目にゴミが入ったり、服のサイズが体に合わなかったりで、身体的にどうも違和感があってしっくりしないこと、また、集まりに参加したところ、普段から自分と仲の良くない人も来ていて、精神的に違和感があってしっくりしないことをそれぞれ「イズイ」と言うかどうかを尋ねた。1 拍目がイともエとも聞こえるもの、1 拍目のあとに鼻音が入り「インズイ」のように聞こえるものも含めた。

身体的違和感の意味では、各年齢層を通じて現在も使用されている。一方の精神的違和感の意味では、各年齢層とも使用するという回答は少ないが、使用するという回答は若い世代の方が多い。

なお、身体的違和感の意味で、高年層の２名が「聞いたことがない」と回答している。この２名は「イズイではなくイズクラシイを使う」と回答している。今回の集計では「イズイ」と「イズクラシイ」は別の語形ということで処理したが、ほかにも高年層・中年層の話者から、「イズイ」に加え「イズッコイ」「イズラッコイ」「イズクラシイ」といった語形を使う、あるいは過去に使ったという回答があった。これらの語形については今後の調査が待たれる。

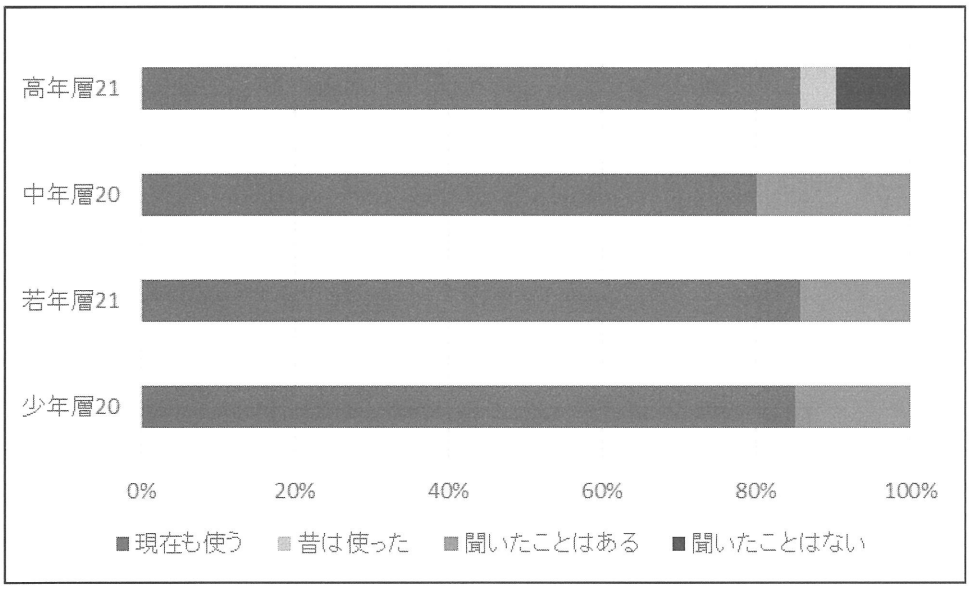


図 2　イズイ（身体的違和感）

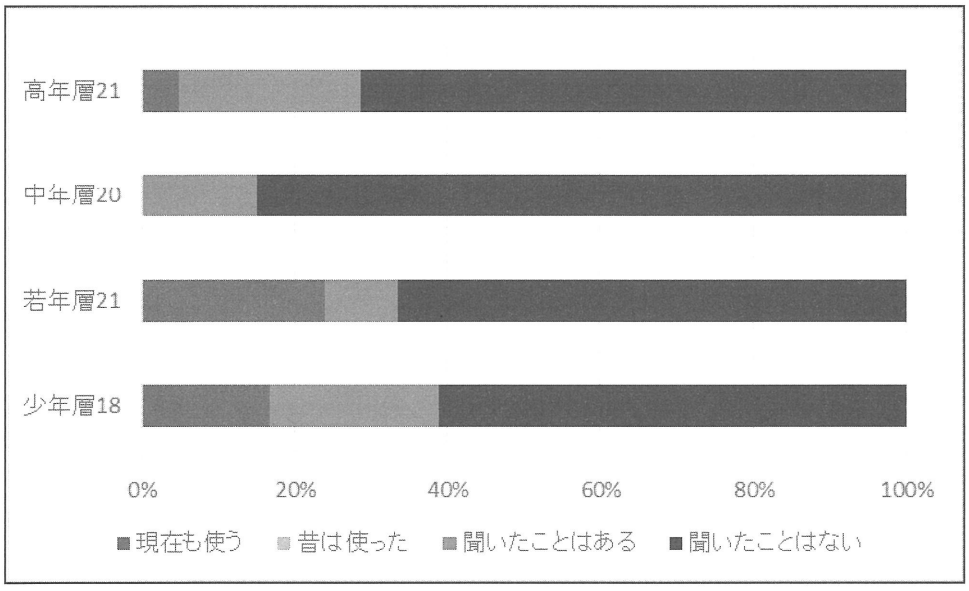


図 3　イズイ（精神的違和感）

(3) おしっこが「ツマル」と言うか（図 4）

尿意をもよおすことを「(おしっこが) ツマル」と言うかを尋ねた。

世代が下がるにつれて、使用する人数が減る。ただ、改まった場面では使いにくく、普段の場面においても、知っていたとしても実際に使用することは少ないと思われる語形である。

(4) 駅まで「アルッテ」行くと言うか（図 5）

「アルク（歩く）」に助詞「テ」が付いた「アルイテ」を、イ音便でなく促音便化した「アルッテ」

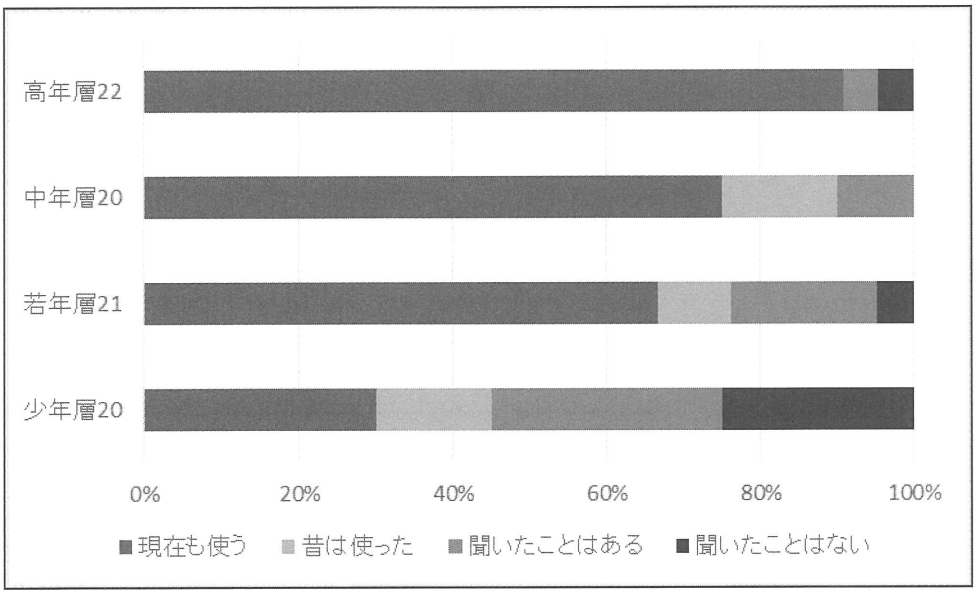


図4　（おしっこが）つまった

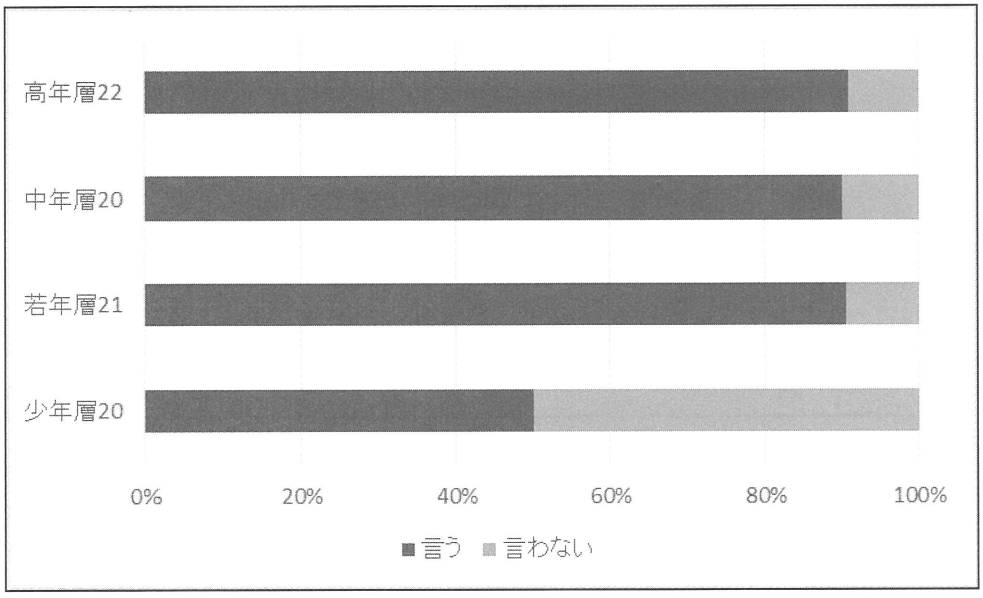


図5　「歩いて」を「アルッテ」と言うか（現在）

と言うかどうかを尋ねた。併用するという回答も多かったが、「アルッテ」と言うかどうかを集計した。

若年層以上は約90%が「言う」であるが、少年層では約50%とだいぶ少なくなる。「アルッテ」はなかなか方言とは気づかない語形であるが、少年層の認識や今後の動向が気になる。

(5) トランプゲーム「ページワン」のかけ声（図6・7）

トランプゲームのひとつ「ページワン」について尋ねた。複数人でやるもので、最初に何枚かずつ配られた持ち札を少しずつ減らしてゆき、なくなったら勝ちである。この遊び方は宮城県と隣県に分布するようである。さらに、宮城県では、最後の1枚がなくなるときのかけ声として、ほかのトランプゲームを含むゲームにもありそうな「アガリ」「ストップ」ではなく、「ノームサイ」「ノーサイ」という言い方がある。今回は、ゲーム自体を知っているか、また、最後の1枚がなくなるときのかけ声をなんと言うか尋ねた。

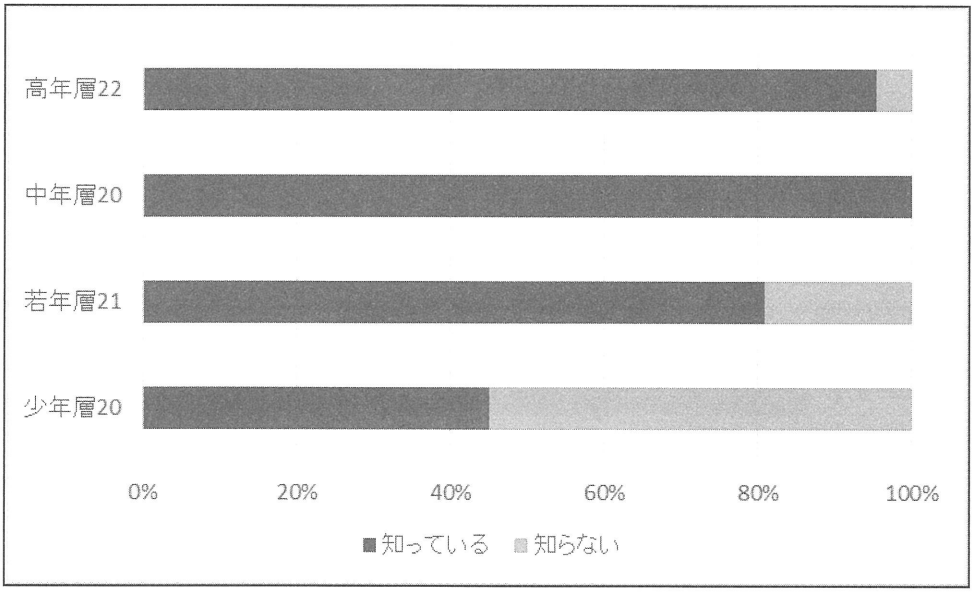


図6　トランプ遊び「ページワン」を知っているか

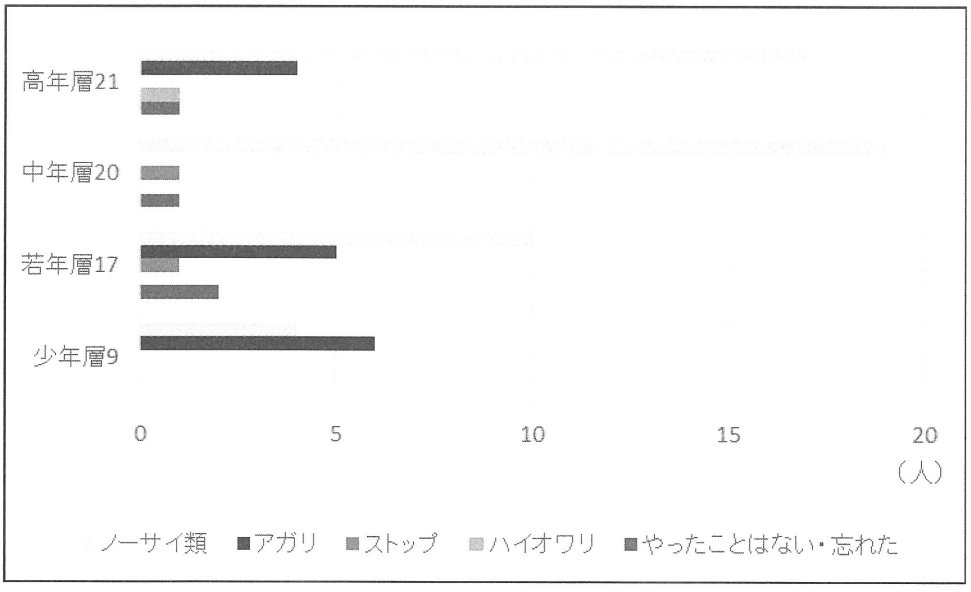


図7　トランプ遊び「ページワン」で、最後の1枚を出すときに何というか（現在）

まず、ゲーム自体の認知度についてである。若年層以上と比べて、少年層の「知っている」という人数が大きく減る。遊びの形式に大きな変化があったのであろうか。

次に、最後の１枚を出すときのかけ声についてである。これはページワンを「知っている」と回答した話者のみを集計対象とした。「やったことはない・忘れた」以外は複数回答である。

「ノーサイ類」には「ノーサイ」に、「ノッサイ」（中年層１名、若年層２名、少年層１名）、「ノーッサイ」（中年層１名）、「ノームサイ」（高年層１名、若年層１名）を含めた。

世代が下がるにつれて、「ノーサイ」類の回答が実人数・割合ともに減り、かわりに「アガリ」「ストップ」といった表現が増える。「ノーサイ」と「アガリ」を併用するという少年層の話者からは、気仙沼以外に住む人と遊ぶ場合は「アガリ」を使用するという回答があった。

「ノーサイ」「ノームサイ」の由来は不明である。

（6）穴の空いた靴下を「オハヨークツシタ」と言うか（図８）

穴の空いた靴下を「オハヨークツシタ」と言うか、また、穴の場所や大きさといった条件も尋ねた。「孫が使う」「子どもから聞いて覚えた」「大人になってから使った」といった回答から、比較的新しい言い方であることがうかがえる。また、「子どもに対して使った」「小学校のころ使った」「高校のころ使った」といった回答から、幼児語のような側面もうかがえる。

穴の場所や大きさについては個人差が見られるが、「現在も使う」「昔は使った」と回答した話者からの回答は、各年齢層を通じ、親指があたる部分に、指が出るくらいの大きさ、というものが多かった。

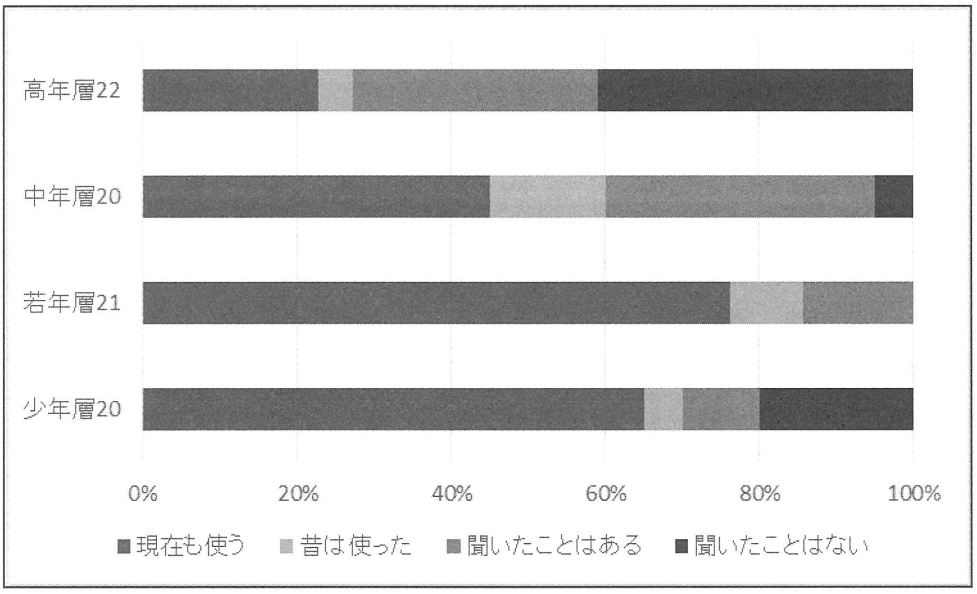


図８　穴の空いた靴下のオハヨークツシタという言い方

(7) 学校における授業の始まりと終わりのかけ声（図 9）

学校における授業の始まりと終わりのかけ声を尋ねた。全国的には「キリツ（起立）」－「レイ（礼）」－「チャクセキ（着席）」であるが、宮城県では「キリツ」と「レイ」の間に「チューモク（注目）」が含まれると言われている。今回はその点に着目し、「チューモク（注目）」という語について「含まれていた」「含まれていなかった」「覚えていない」のいずれであるかも尋ねた。「覚えていない」という回答は、「含まれていた」可能性はあるものの、確認はできないということで、「含まれていなかった」と合わせて集計した。

多くのバリエーションが得られた。たとえば、起立せずに挨拶をする場合、「キリツ」「チャクセキ」はない。また、「○時間目の授業始めます」といった文言を追加することもある。教員によって差がある（あった）という回答もあった。

「チューモク」について、はっきりと「含まれていた」という話者は、高年層で約 50%で、世代が下がるにつれさらに増え、現役の高校生である少年層は全員「含まれていた」と回答している。現在でも使われているということである。

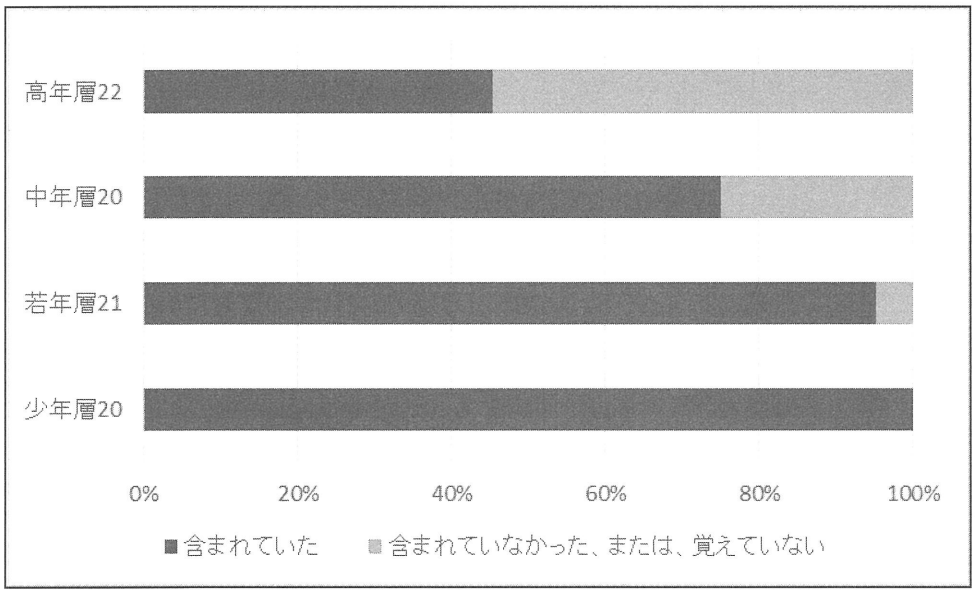
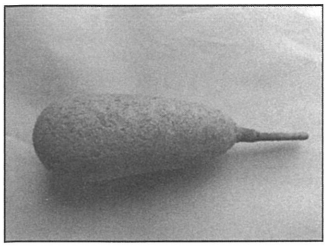


図 9　授業のあいさつにおける「チューモク」という表現

(8)「ホットドック」「アメリカンドック」とはどのような食品を言うか（図 10. 11）

写真 1・2 の食品について、何と言うかを尋ねた。一般的には写真 1 を「アメリカンドック」、写真 2 を「ホットドック」と言うが、宮城県では両者を「ホットドック」と言うことがある。気仙沼での使用状況に着目した。なお、「ホットドック」には「ホットドッグ」、「アメリカンドック」には「アメリカンドッグ」も含めた。複数回答である。

それぞれの食品について「食品を知らない」「名前を知らない」と 5 名ずつが回答した。また、併用するという回答が中年層・若年層それぞれ 1 名からあり、いずれも写真 1 の食品について「ホッ



（写真 1）

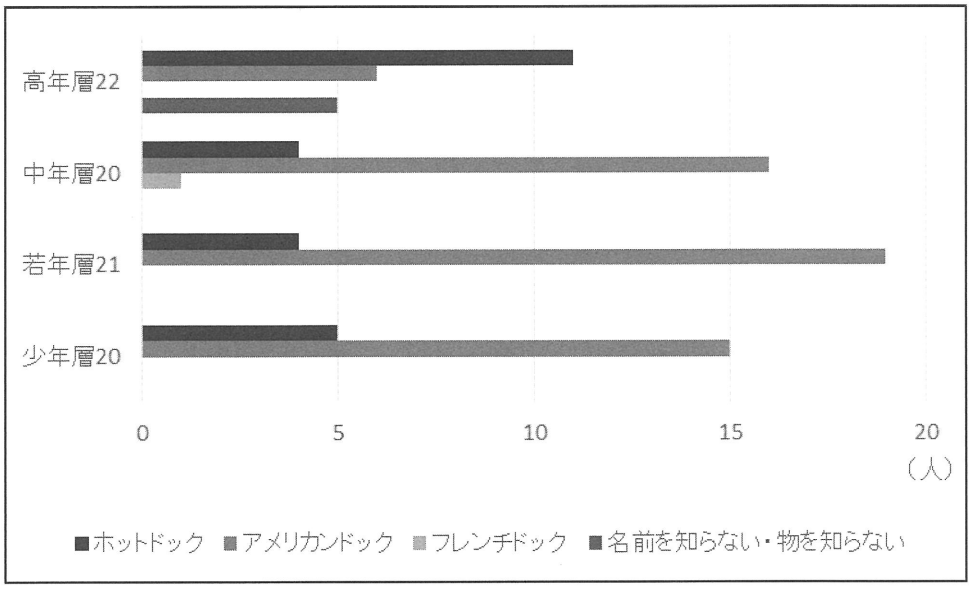
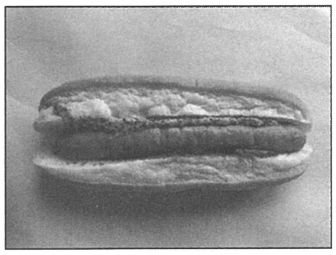


図 10　棒に刺したソーセージに衣を付けて揚げた食品（写真 1）



（写真 2）

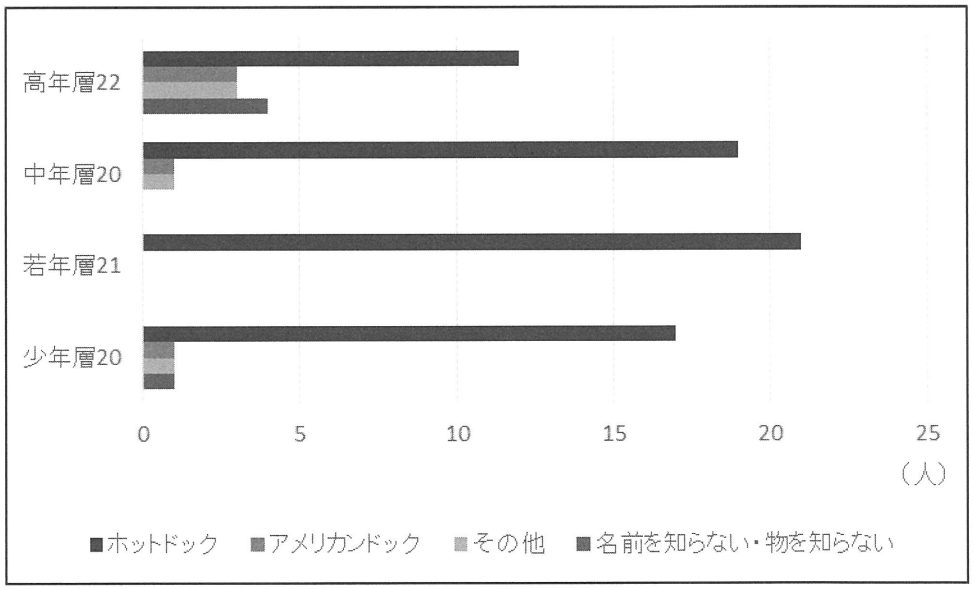


図 11　細長いパンに切れ目を入れてソーセージを挟んだ食品（写真 2）

トドック」「アメリカンドック」のどちらも言うとのことであった。写真 2 の食品についての「その他」の回答は、高年層が「サンドイッチ」1、「サンド」2、中年層が「パンに挟んだソーセージ」、若年層が「ソーセージパン」である。

写真 1 を「アメリカンドック」、写真 2 を「ホットドック」と言うと回答したのは高年層で約 30%、それ以外の世代で約 75%である。高年層では話者の約 50%が写真 1 の食品を「ホットドック」と言い、「アメリカンドック」を大きく上回るが、中年層以下では使い分けられるようになっている。

頭痛を表すオノマトペ

赤間　咲良

1　調査目的

今回の調査は、頭痛を表す際にオノマトペが使用されているのか、また、痛みの強さによってオノマトペが使い分けられているのかを明らかにすることが目的である。

頭痛を表す際に使用されるオノマトペについて、竹田・小川（2015）では群発頭痛、片頭痛、緊張性頭痛においてオノマトペの出現割合が高いものとして、「ガンガン」、「ズキズキ」、「ズキンズキン」がみられ、特に「ガンガン」は頭痛において多く使用されていることが述べられている。気仙沼市方言について調べた赤間・大内・川瀬（2024）では、気仙沼市方言の身体感覚を表すオノマトペについて、頭痛では「ズキズキ」、「ズキンズキン」、「ズクンズクン」、熱風邪による頭痛では「ガンガン」、「ズキンズキン」など、めまいでは「クラクラ」が出現され、頭の痛みによってオノマトペの使用が異なっていることがわかった。

次に、痛みの強さによってオノマトペが使い分けられていることについて、吉永（2021）では「ズキッ」、「ズキン」、「ズキズキ」の痛みの強さや部位、持続時間の違いを分析している。「ズキッ」について、痛みの強さでは「軽度」、部位では「表面的」、持続時間では「瞬間的」である回答が多くみられ、語末の促音によって息継ぎのような区切りとして機能していることを述べられており、「ズキン」や「ズキズキ」においても語末の撥音や畳語によって痛みの強さなどが影響していることがわかった。苧阪（1999）では、頭痛を表すオノマトペについて「ガンガン」と「ズキズキ」では「ガンガン」が「ズキズキ」よりも強い痛みを表していることが明らかとなった。

このように、頭痛を表すオノマトペについて「ズキズキ」「ガンガン」など様々な語形や意味で使用されていることがわかった。加えて、オノマトペに促音や撥音など特殊拍の付加によって痛みの強さや部位が異なっていることも明らかとなった。しかし、気仙沼市方言における頭痛を表すオノマトペの語形の違いや特殊拍などの付加による痛みの程度の差について明らかになってはいない。

そこで、本稿では「頭痛を表す際に、オノマトペの出現の有無があるのか。また、頭痛の種類によって使用されるオノマトペの違いはあるのか。」を調査課題として明らかにしていく。

2　調査の概略

2.1　調査方法

本調査はアンケート調査であり、5 分程度で回答できるように想定された、自記式の 6 問となっている。調査項目は以下の通りである。

(1) 頭が割れるように痛む感じを、どのように言いますか。

(2) 何となく頭が痛む感じを、どのように言いますか。
(3) (1)、(2) で回答された言葉について、「痛みの強さ」、「痛みの部位」、「痛みの持続時間」の各項目で当てはまるものに○を1つずつ付けてください。
(1) 頭が割れるように痛む感じを表す言葉
〈痛みの強さ〉1. 軽度　2. 中程度　3. 重度
〈痛みの部位〉1. 表面　2. 奥のほう
〈痛みの持続時間〉1. 瞬間的　2. 一定時間持続
(2) 何となく頭が痛む感じを表す言葉
〈痛みの強さ〉1. 軽度　2. 中程度　3. 重度
〈痛みの部位〉1. 表面　2. 奥のほう
〈痛みの持続時間〉1. 瞬間的　2. 一定時間持続
(4) 熱によって頭が痛む感じを、どのように言いますか。
(5) めまいによって頭がひどく痛む感じを、どのように言いますか。
(6) (4)、(5) で回答された言葉について、「痛みの強さ」、「痛みの部位」、「痛みの持続時間」の各項目で当てはまるものに○を1つずつ付けてください。
(4) 熱によって頭が痛む感じを、どのように言いますか。
〈痛みの強さ〉1. 軽度　2. 中程度　3. 重度
〈痛みの部位〉1. 表面　2. 奥のほう
〈痛みの持続時間〉1. 瞬間的　2. 一定時間持続
(5) めまいによって頭がひどく痛む感じを、どのように言いますか。
〈痛みの強さ〉1. 軽度　2. 中程度　3. 重度
〈痛みの部位〉1. 表面　2. 奥のほう
〈痛みの持続時間〉1. 瞬間的　2. 一定時間持続

上記の調査項目の (1) (2) (4) (5) の選択肢は「ずきっ・ずきん・ずきずき・ずぎずぎ・ずっきずき・ずきりずきり・ずきんずきん・ずっきんずっきん」であり、該当する回答が調査項目にない場合、「その他」の欄に記入するように促した。選択肢について、赤間・大内・川瀬 (2024) の気仙沼市方言で頭の痛みを表すオノマトペに「ズキズキ」「ズキンズキン」が使用されていることを踏まえ、それらと類似した語形を選択肢として取り上げた。

アンケートの配布期間は2024年8月7日～8月10日の4日間であり、回収期間は調査終了後～2024年9月末日であった。

調査対象者は気仙沼市出身の生え抜き話者の83名であり、そのうち本項目を回答いただいた方が71名であった。回答いただいた71名の年齢層と性別について、高年層 (60代以上) 男性11名、女性10名、中年層 (50代～40代) 男性5名、女性14名、若年層 (30代～20代) 男性7名、女性12名、中年層 (10代) 男性5名、女性7名である。

2.2　対象とするオノマトペ

調査で得られたオノマトペは基本的に副詞として使用されているものを対象として扱った。ただし、「頭がもあもあする」のようにオノマトペにスル動詞が付いたものは、オノマトペによって頭痛の様子を説明していると判断できるため対象とした。なお、分析する際はスル動詞を除いてオノマトペ単体として扱う。

オノマトペかどうか判断に迷った語について、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』、『日本方言大辞典』、『日本国語大辞典』でオノマトペとして使用されていることが確認できるものは分析対象として扱った。

自由記述の回答について、「かなり痛む」「熱っぽい」といったオノマトペが含まれていないものは「オノマトペ以外の回答」として扱った。

3　頭痛を表すオノマトペの形態

頭痛を表すオノマトペの形態を考察するため、オノマトペの出現の有無、調査項目で出現したオノマトペの語形の 2 点についてみていく。対象とする調査項目は（1）（2）（4）（5）である。基本的に 1 種の調査項目に対して 1 回答であるが、複数回答が得られた場合は全て分析対象とみなした。それにより、調査項目の（1）（2）（4）（5）で得られたオノマトペの異なり語数は 25 であり、得られたオノマトペの語数やオノマトペ以外の回答についてまとめたものが表 1 である。

表 1 では、() に回答数を表しており、回答率については小数点以下第一位を四捨五入している。また、太文字のオノマトペは調査項目の選択肢として取り上げたものである。下線は各調査項目で回答率が高い上位 3 位のオノマトペに引いており、網掛けは 1 種の調査項目にのみ回答が得られたオノマトペに施している。

まず、オノマトペとオノマトペ以外の回答についてみていくと、得られた回答の多くがオノマトペであることがわかる。オノマトペ以外の回答について、調査項目の（1）では 3%、(2）では 8% 、（4）では 3%、(5）では 0% であり、全ての項目で 10%以下となっている。得られた回答として、調査項目の（1）では「かなり痛む」「イダイ」、(2）では「いでー」など、(4）では「頭痛えなあー」がみられており、痛いという言葉によって表していることがわかる。また、オノマトペ以外の回答が得られた年齢層は、高年層と中年層であった。これらのことから、オノマトペ以外の回答の割合は低いが、高年層と中年層を中心として「イダイ」のように痛むことが直接的に表現されている。（5）について、オノマトペ以外の回答の割合が 0%であったため（1）（2）（4）と痛みの質が異なっていることが考えられる。

次に、調査項目で出現したオノマトペの語形についてみていく。(1）(2）(4）(5）の調査項目の全てにおいて回答が得られたオノマトペもあり、それらは「ガンガン」「ズキズキ」「ズギズギ」「ズキン」「ズキンズキン」であった。「ガンガン」は選択肢としてあげられていなかったものの、竹田・小川（2015）で述べられたように頭痛を表すオノマトペとして中心的なものであることがわかる。また、調査項目の（1）（4）では「ガンガン」の回答率が 20%以上と高いものの、(2）(5）では 5%

表１　(1)(2)(4)(5)の調査項目で得られた回答

調査項目 / 回答	(1) 頭が割れるように痛む感じ	(2) 何となく頭が痛む感じ	(4) 熱によって頭が痛む感じ	(5) めまいによって頭がひどく痛む感じ
ガンガン	32% (23)	2% (1)	23% (14)	5% (3)
ギリギリ	1% (1)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
クラクラ	0% (0)	0% (0)	0% (0)	9% (5)
グラグラ	0% (0)	0% (0)	0% (0)	5% (3)
グラングラン	0% (0)	0% (0)	0% (0)	5% (3)
グワングワン	1% (1)	0% (0)	0% (0)	2% (1)
ズキズキ	21% (15)	39% (24)	29% (18)	31% (17)
ズギズギ	17% (12)	15% (9)	10% (6)	9% (5)
ズキッ	0% (0)	18% (11)	0% (0)	7% (4)
ズキリズキリ	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
ズキン	1% (1)	13% (8)	5% (3)	4% (2)
ズキンズキン	8% (6)	3% (2)	10% (6)	15% (8)
ズギンズギン	4% (3)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
ズグズグ	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
ズグンズグン	1% (1)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
ズッキズキ	0% (0)	0% (0)	0% (0)	2% (1)
ズッキンズッキン	8% (6)	0% (0)	8% (5)	5% (3)
チクチク	0% (0)	2% (1)	0% (0)	0% (0)
ヅグヅグ	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
ドクドク	0% (0)	2% (1)	0% (0)	0% (0)
ボォーッ	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
ボワーン	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
モアモア	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
モーッ	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
モヤモヤ	0% (0)	0% (0)	2% (1)	0% (0)
オノマトペ以外の回答	3% (2)	8% (5)	3% (2)	0% (0)
計	100% (71)	100% (62)	100% (62)	100% (55)

県―』国立国語研究所
竹田晃子・小川節郎（2015）「慢性痛保有者における痛みのオノマトペ」『ペインクリニック』36-6
浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ　―音象徴と構造―』くろしお出版
吉永尚（2021）「語形と意味の相関について―体感のオノマトペの観察をもとに―」『園田学園女子大学論文集』55

資　　料

小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』小学館
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部・北原保雄（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館

推量表現の形式（ベ類／ベオン類／ゴッテ類）

竹田　晃子

1　はじめに

宮城県気仙沼市の推量表現形式については、ベ類、ベオン類、ゴッテ類など複数の形式が用いられることが、談話資料から把握されている（竹田 2019）。そこで、2023 年 8 月 9 日・10 日には、高年層話者〔70 代男性〕〔60 代女性 A〕〔60 代女性 B〕を対象に調査をおこない、次のことを確認した（竹田 2024）。

ベ類：単独で用いる場合、出来事の生起を推し量りつつも、話し手が確実に起きるあるいは過去に確実に起きたと思っている出来事を表す。ただし、断定的できつい表現になるため、ネやナなどを後接、あるいはデネベガ（ー）など否定疑問の形を取るなど、他の形式と組み合わせることが多い。「と思う」由来のドモー（ヨ）と置き換えが可能である。ベ単独で用いると、推量表現よりも意志表現の意味で取りやすくなる。副詞タブンと共起する。

ベオン類：ベに終助詞モノが付いたベモノと、それが変化したベオンなどがあり、語源意識がある。話し手自身がその出来事の生起について「私はそう思っている／認識している」という意味になる。ベ類は、直前に直接見聞きした出来事などを根拠とすることができるが、ベオン類はその場合では使用しにくく、話し手の認識に偏っている。また、副詞タブンとは共起しない。

ゴッテ類：コト＋ダに由来すると考えられるが、語源意識はない。ゴッテァ／ゴッテ（ー）のように発音され、話し手の中で推定した出来事を表す。推定の根拠は、自分の知識、直前の状況、当然の結果などで、根拠が単独でも複数でもかまわない。聞き手に対して、話し手が「私はそういうことだと思うよ」と伝える表現になる。ベ類に比べて確実だと思う出来事を表す。副詞タブンと共起する。

これらのことをふまえて、本稿は、宮城県気仙沼市の推量表現形式における世代差・性差について、東北大学文学部国語学研究室の主催でおこなわれた 2024 年 8 月 7-10 日の面接調査（合計 83 名）に参加し[注1]、その調査結果に基づいて報告する。

2　調査の概要と結果

調査は、(1) ～ (5) の 5 項目によっておこなった。調査員が項目を読み上げながら語形を呈示し、話者（人数は表 1 の「総数」参照）に使用する語形を実際に発音してもらった。

調査結果から、話者が使うと回答した語形を、質問項目ごとに表 1～表 5 にまとめた。以下では年代差・性差によって、気仙沼市方言の様相を確認する。なお、属性によって人数の偏りがあるた

め、属性ごとの総数を母数とした割合を示した。回答数がゼロである場合、空欄とした。

(1) 使用語形の確認

項目：去年の調査で、60 代以上の方々から、気仙沼には、ご家族や仲の良い友達に話すとき、「行グベナー」「行グベオン」「行グゴデァ」のような言い方がある、と教えてもらいました。そこで、教えていただきたいのですが、○○（話者）さんは、この言い方をなさることがありますか。(呈示用紙の語例を指しながら）これを一つずつ読んで、使うかどうか確認してみていただけますか。選択肢（それぞれの語形について）：使う／使わない／聞いたことがある

表1 (1)使用語形の確認（%）

		1. 行グベナー類	2. 行グベオン類	3. 行グゴデァ類	総数
高年層	男性	100	45	27	11
22名	女性	73	73	55	11
中年層	男性	83	67	33	6
20名	女性	79		29	14
若年層	男性	100	43	43	7
21名	女性	64	29		14
少年層	男性	60	10		10
20名	女性	40	10		10

どの語形も若い年層ほど使用者が少なく、方言語形が衰退している様子がうかがえる。表では省略したが、どの語形も若い年層ほど「聞いたことがある」の回答者が多く、地域で使われているものの、若い年層は自分では使用しない様子がわかる。

具体的な語形をみてみる。行グベナー類は全年層に使用者がいるが、少年層で特に少ない。行グベオン類は、高年層を除いて女性に少なく、中年層の女性では使用者がいなかった。ベオン類は、青森・秋田・岩手ではビョンの形になることがあるが、高年層・男性１名がビョンも使うと回答した。また、ベ類とベオン類については、中年層以下では女性に少ないという傾向がある。

行グゴデァ類については、若年層・女性と少年層に使用者がいない。若年層・女性 1 名からは、条件表現の「イグゴッテ、イグ。(あなたが行くなら行く）に使う」という回答があった。この地域から宮城県・福島県・山形県では、認識的条件文にゴッテが使われる場合があるため、それを指した回答と思われる。

なお、2023 年度実施の高年層の面接調査ではゴデァの形が回答されることが多かったため、表１ではゴデァとしたが、今回は主にゴッテ（ー）が回答されたため、表１でもゴッテ（ー）を含んで集計した。ゴデァを回答したのは高年層・男性１名だったため、以降の表 2〜表 5 ではゴッテ類を代表語形とし、ゴデァ／ゴッテ（ー）をまとめて集計する。

表2　(2)一般的な推量（%）

		1.イグベナー類	2.イグベオン類	3.イグゴッテ類	4.他：否定疑問形式	4.他：イグベモノ	4.他：イグドモー
高年層	男11	45	36		27	9	
22名	女11	18	36	45			
中年層	男06	67	67		17		17
20名	女14	50	43	21			
若年層	男07	86	14				
21名	女14	86	21	7			
少年層	男10	50	10				
20名	女10	70					

表3　(3)先週・自分で見聞きした根拠（%）

		1.イグベナー類	2.イグベオン類	3.イグゴッテ類	4.他：否定疑問形式	4.他：伝聞形式	4.他：イグベモノ	4.他：イグドモー
高年層	男11	55	36	18	9			
22名	女11	9	45	36	18	9	9	9
中年層	男06	83	33					
20名	女14	43	36	14	7	7		
若年層	男07	57	14	14	14			
21名	女14	57	29	21	7	14		
少年層	男10	60	10					10
20名	女10	60						10

表4　(4)知識確認の要求-潜在共有知識の活性化（%）

		1.イダベ類	2.イダベオン類	3.イダゴッテ類	4.他：イダベッチャ	4.他：イダッチャ	4.他：イタジャン	4.他：イダヨネ	4.他：イタッケ
高年層	男11	91			9			9	
22名	女11	36			18	45		9	
中年層	男06	100	33						
20名	女14	50	14		14	43		7	
若年層	男07	100	14			29			
21名	女14	93				29			
少年層	男10	60	10				10	20	
20名	女10	70				10	20		10

表5　(5)知識確認の要求-認識の同一化要求（%）

		1.アブネエベ類	2.アブネエベオン類	3.アブネエゴッテ類	4.他：アブネベッチャー	4.他：アブネッチャー	4.他：アブナイジャン	4.他：アブネヨ	4.他：アブナイデショー
高年層	男11	91		18	9				
22名	女11	64		18	18	45		18	
中年層	男06	100	17	17					
20名	女14	50		14		21		14	
若年層	男07	100	14	43					
21名	女14	86		21	7	14			
少年層	男10	80	10				10	10	
20名	女10	70						10	20

（2）一般的な推量（表 2）

項目：仲の良い友達から「Aさんは今日、気仙沼市役所に行くだろうか？」と聞かれました。○○（話者）さんはAさんのことを想像して、迷いながらも「たぶん行くだろう」という意味のことを答えます。そのとき、（呈示用紙の語例を指しながら）「たぶんイグベナー」「たぶんイグベオン」「たぶんイグゴデァ」、どれを使いますか？

高年層と中年層はイグベオン類の回答が多めである。イグベナー類は全年層に回答があり、高年層・女性を除いて使用者が多い。若年層と少年層はイグベオン類が少ないかゼロで、イグベナー類のほうが多い。イグゴッテ類は女性のみに回答があり、若年層、中年層、高年層の順に多くなっている。

（3）先週・自分で見聞きした根拠（表 3）

項目：友達に、「Bさんも今日、市役所に行くだろうか？」と聞かれました。○○（話者）さんは、先週、Bさんに会ったとき、Bさんが「市役所に行く用事がある」と話していたのを知っています。そこで、迷いながらも「たぶん行くだろう」という意味のことを答えます。そのとき、（呈示用紙の語例を指しながら）「たぶんイグベナー」「たぶんイグベオン」「たぶんイグゴデァ」、どれを使いますか？

イグベナー類は全年層に回答があり、（2）の一般的な推量と同様、高年層・女性を除いて全体に使用者が多い。イグベオン類は年層が高いほど使用者が多く、イグゴッテ類も同様だがイグベオン類より少なめである。また、高年層・男性１名にイグベモノが回答された。（2）に比べるとイグゴッテ類の使用者の属性が広い。また、否定疑問形式（イグンデ（ネー／ナイ）（ノ（ー）／ガ）、イクンジャナイなど）や、伝聞形式（イグッテ（イ／ユ）ッデダヨ（ー）、イグッツテタヨ、イグラシーヨなど）、イグドモーヨなども回答された。

（4）知識確認の要求−潜在共有知識の活性化（表 4）

項目：友達に、「ほら、同級生に高木っていただろう？（※いたのを覚えているだろう？）（あの背の高い男の子だよ）」と聞くとき、（呈示用紙の語例を指しながら）「イダベ」「イダベオン」「イダゴデァ」、どれを使いますか？※「覚えてるだろう？」でも可。（回答例：オベデラベ／オベデラベォン／オベデラゴデァ）※「あの背の高い男の子だよ」は「あの子だよ」などに変更または省略してもかまいません。

イダベ類は全年層に回答があり、少年層を除いて女性よりも男性に多い。イダベオン類は、少ないが中年層以下に回答者がいる。イダゴッテ類は全年層で回答がゼロで、この用法を持たないことが明確である。一方で、イダベッチャが高年層と中年層・女性、イダッチャが、女性の高年層・中年層・若年層・少年層と、若年層・男性に回答者がいる。若年層ではイタジャンも回答されており、この用法では推量形式以外の〜チャや〜ジャンなどが用いられる。

（5）知識確認の要求-認識の同一化要求（表 5）

項目：危ないことをした中学生をその場で叱る場面で、「何をするんだ！　そんなことをしたら危ないだろう！（※（危ないのが）わかるだろう！）」と言うとき、（呈示用紙の語例を指しながら）「アブネェベ」「アブネェベオン」「アブネェゴデァ」、どれを使いますか？　※回答例：ワガルベ！／ワガルベォン！／ワガルゴデァ！（集計では合計した）

アブネェベ類が全年層で回答されており、使用者が最も多い。アブネベオン類は男性のみに使用者がいるが、多くはない。アブネェゴッテ類は高年層・中年層・若年層に少しずつ使用者がいるが、話者数人については調査時の注記に「直接本人には言わない」「他の人と話しているときに言う」「怒って言う」などとあり、現場を離れて「私は強くそう思った」と発話する場合の用法とみられる。（5）の場面は危険を主張する場面であるため、感嘆表現に連続している。この地域では文末の「～ゴド／ゴダ」などで感嘆表現を表す場合があり、感嘆表現に近い意味合いで発話された回答もあったとみられる。このほか、アブネベッチャー、アブネッチャ（高年層・中年層・若年層の女性のみ）、アブネヨも回答された。また、少年層からはアブナイデショーも回答された。

3　まとめと今後の課題

以上、ベ類、ベオン類、ゴッテ類（ゴッテァ類）を中心に、推量表現とそれに連続する知識確認の要求の表現において、これらの形式がどのように回答されるかを調査し、その結果を概観した。

全体に、共通語にない方言形式は、若年層以上では使われるが、若い人ほど使用者が少ない。～ドモー（と思う）、～ジャン、～ダヨネ、～デショーなどの共通語的な形式が、少年層でやや多く回答された。また、2023 年度の記述調査で回答されたゴテァが、2024 年度の多人数調査では 1 名のみで、全体にゴッテ（ー）が多い結果となった。

ベ類については、他の形式に比べて全体に使用者が多く、男性に特に多い。一方で、ゴッテ類は女性に多いという傾向が確認された。ベオン類は、（2）一般的な推量表現や（3）自分で見聞きした根拠がある表現には用いられるが、知識確認の要求には用いられにくい。ゴッテ類は、（2）一般的な推量表現と（3）先週・自分で見聞きした根拠の表現では、上の年層の女性の使用者が目立ち、潜在共有知識の活性化のうち、(4)潜在共有知識の活性化には用いられず、(5)認識の同一要求では、感嘆表現との連続性があると思われる。

連続性という点では、用法について、ゴッテ類は条件表現の形式として使うという回答があった。『方言文法全国地図』の気仙沼市の地点においても、「手紙を書くなら字をきれいに書いてくれ」（第 133 図）にカグゴッタラ（バ）が回答されている。気仙沼市方言では、コト由来のゴッテ／ゴッテァ／ゴドなどの形が、推量表現、感嘆表現、認識的条件文の接続助詞相当の形式として使われており、実際、一人の話者が全ての用法で使う場合もある。本稿でみてきたように、推量表現とその周辺の用法では衰退が確認されたが、感嘆表現や条件文で用いられる影響による可能性も考えられる。また、ベ類やベオン類などの形式は地理的にも連続して分布しており、気仙沼市の北部に隣接する岩手県でも、ベオンやコト由来のゴッタが推量表現形式として使われている。気仙沼市方言で確認

した以上の傾向がどのように連続するか、今後の課題の一つである。

注

1　本研究はJSPS科研20H00015の助成を受けた。

文　献

国立国語研究所（1994）『方言文法全国地図　第3集（活用編2）』財務省印刷局

高田群司（2011）「岩手県遠野方言の推量表現―形式名詞の文法化に注目して―」『日本語文法』11-2

竹田晃子（2019）「推量・意志・勧誘・命令表現の形式」東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話［資料編・分析編］―宮城県気仙沼市・名取市方言―』ひつじ書房

竹田晃子（2024）「推量表現とその周辺に用いられる形式の特徴」「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」報告書『東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2』東北大学方言研究センター

舩木礼子（2006）「推量表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック2』科学研究費基盤研究(B)「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」（2002-2005年度、課題番号14310196）、https://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG2.pdf〔2024/1/4閲覧〕

舩木礼子（2017）「推量表現形式の分布とその変化―地域共通形式への収斂と脱推量形式化―」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言―ことばの変化は方言地図にどう現れるか―』朝倉書店

終助詞ゴド

玉懸　元

1　本稿の目的

気仙沼市方言では、物事のありさまに驚いたり感動したりした際、しばしば文の結びがゴドという形をとる。たとえば、とてもきれいな川を見たとき、次のようにゴドを用い、驚きや感動を表す（長音の有無は任意）。

⑴ きれいだゴドー。

⑵ きれいなゴドー。

⑶ きれいな川だゴドー。

⑷ 川がきれいだゴドー。

⑸ きれいな川があるゴドー。

このゴドは、⑴のように終止形に接続する場合もあれば、⑵のように連体形に接続する場合もある。また、⑴⑵のように形容動詞一語文を結ぶこともあれば、⑶のように連体修飾を伴う名詞文を結んだり、⑷⑸のように補語を伴う形容動詞文や動詞文を結んだりもする（ただし、ゴドとよくなじむ構文とあまりなじまない構文がある。後述）。

この度の調査（以下2024年調査と言うことがある）では、気仙沼市生え抜きの話者83名を対象とし、このゴドについて次のようなことを調べた。

○ ゴドを使うか・使わないか。

○ ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか。

○ ゴドはどんな構文となじむか・なじまないか。

調査文は上掲の⑴〜⑸である。「旅先などでとてもきれいな川を見たとします」と前置きした上で、⑴〜⑸それぞれのようにゴドを使うかどうかを尋ねた。その際、有声化の有無（ゴドかコトか）は不問とした。

話者83名の世代別・性別人数は次の通りである。

○ 高年層（60歳以上）：22名（男性11名、女性11名）

○ 中年層（40〜59歳）：20名（男性5名、女性15名）

○ 若年層（20〜39歳）：21名（男性8名、女性13名）

○ 少年層（10代後半）：20名（男性10名、女性10名）

本稿では、以上の調査について結果を報告し、考察を加える。また、2006年に気仙沼市で行った同様の調査（以下2006年調査）の結果と適宜見比べながら、時間的な変化にも言及したい。なお、2006年調査の結果については、玉懸元（2012）で報告を行った。

2　調査結果とその考察

2.1　ゴドを使うか・使わないか

この度の調査において、調査文(1)～(5)のいずれか1つ以上について「言う」と回答した話者は69名であった。すなわち、これらの話者は、使い方の広狭に違いはあれどもゴドを使用する人々である。一方、調査文(1)～(5)のいずれについても「言わない」と回答した話者は14名であった。これらの話者は、日常的にゴドを使用しない人々と考えられる。

以上のような調査結果を、2006年調査の結果と並べ、表として示す。(表1)

表1　ゴドを使うか・使わないか（2006年調査との対照）

	2006年	2024年
使う	66	69
使わない	4	14
合計	70	83

注：表中の数値は人数

両調査の結果を見比べると、不使用者が4名から14名へ増えた点が目を引く。これは有意な偏りと認められ（$\chi^2(1) = 4.55, p < .05$）、気仙沼市方言においてゴドはやや使われなくなってきたようである。

続いて、両調査の結果を世代別に見てみよう。(表2・表3)

表2　ゴドを使うか・使わないか（2006年調査、世代別）

	高年層	中年層	若年層	少年層	合計
使う	22	14	12	18	66
使わない	0	1	1	2	4
合計	22	15	13	20	70

注：表中の数値は人数

表3　ゴドを使うか・使わないか（2024年調査、世代別）

	高年層	中年層	若年層	少年層	合計
使う	19	17	18	15	69
使わない	3	3	3	5	14
合計	22	20	21	20	83

注：表中の数値は人数

2006年調査では、高・中・若・少年層のいずれの世代にも、ゴドの不使用者がほとんど見られない。一方2024年調査では、各世代に3〜5名ずつ、ゴドの不使用者が見られる。ゴドの衰退は、全世代を通じて緩やかに進んでいるものと察せられる。

以下では、ゴドの使用者69名から得られた回答をめぐって、調査結果の報告とその考察を進める。

2.2　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか

この度の調査では、主に調査文(1)(2)（次に再掲）によって、気仙沼市方言のゴドが終止形に接続するか、連体形に接続するかを調べた。

(1) きれいだゴドー。（終止形＋ゴド）

(2) きれいなゴドー。（連体形＋ゴド）

その結果、ゴドの使用者69名のうち、(1)の「終止形＋ゴド」について「言う」と回答した話者は67名であった。残る2名は「言わない」という回答であったが、その2名からは同じく「終止形＋ゴド」に当たる別の調査文（川がきれいだゴドー）について「言う」という回答が得られた。終止形接続はゴドの使用者皆が用いるものと考えられる。一方、(2)の「連体形＋ゴド」について「言う」と回答した話者は27名であった。

以上のような調査結果を、2006年調査の結果と並べ、表として示す。（表4）

表4　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか（2006年調査との対照）

	2006年	2024年
連体形のみ	6	0
連体形と終止形	18	27
終止形のみ	42	42
合計	66	69

注：表中の数値は人数

両調査の結果を見比べると、連体形接続のみを用いる話者が2006年調査では6名見られたのに対して、2024年調査では一人も見られなくなった点が注目される。

ここで、2024年調査の結果を世代別に見てみよう。（図1）

図1を見ると、連体形接続を用いる話者が、高年層13名・中年層6名・若年層6名・少年層2名と、世代が若くなるにつれて減少していることが分かる。

このような世代的変化のありさまをもっと詳しく知るために、話者それぞれの回答を見る。図2〜5には、高・中・若・少年層の話者を生年順に並べ、話者それぞれが連体形接続・終止形接続を「使う（●）」か「使わない（×）」を示した。生年の欄に示したのは、1900年代または2000年代の下二桁である。（図2〜5）

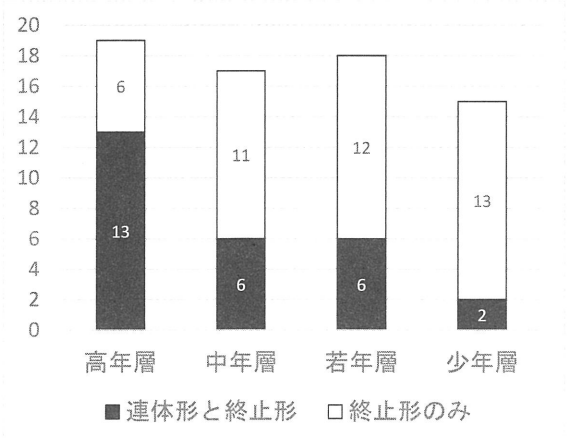


図1　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか（世代別）

注：図中の数値は人数

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
生　年	33	38	38	44	44	47	48	48	49	49	51	51	53	54	55	57	57	57	64
連体形接続	×	●	×	●	●	●	●	×	●	×	●	●	×	●	●	●	●	×	●
終止形接続	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図2　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか（高年層話者の回答）

注：●は「使う」、×は「使わない」を表す。生年は1900年代または2000年代の下二桁である。以下同じ。

No.	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
生　年	66	66	66	69	69	69	69	73	74	76	76	77	78	78	82	82	84
連体形接続	●	×	×	●	●	×	×	●	×	●	×	×	×	×	●	×	×
終止形接続	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図3　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか（中年層話者の回答）

No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
生　年	85	85	85	86	87	87	88	90	92	93	94	94	95	95	99	00	02	02
連体形接続	●	●	●	●	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
終止形接続	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図4　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか（若年層話者の回答）

No.	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69
生　年	06	07	07	07	08	08	08	08	08	08	08	08	08	08	08
連体形接続	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×	×	●	×	×	×
終止形接続	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図5　ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか（少年層話者の回答）

図2〜5によって話者それぞれの回答を生年順に観察すると、連体形接続を用いる話者は、1990年生まれまで、つまり30代半ばより年長の世代にまとまって認められる（25名）。それより若い世代で連体形接続を用いる話者は、きわめて稀である（2名）。連体形接続のみを用いる話者がも

はや一人も見られなくなった点も考えあわせれば、30代半ばの話者たちを限りとし、連体形接続は消滅に向かっているものと理解される。

もともとゴドは名詞「事」であって、連体形に接続するのが本来である。しかし、文末に用いられるゴドにおいて、文を終止する働きの獲得（自立語が新たに非自立語的機能を獲得する、いわゆる文法化）が進み、終止形にも接続するようになった。気仙沼市方言に限らず、白石市方言等の各地方言や共通語にも観察されるゴド（事）の終助詞化である。

この度の調査結果は、気仙沼市方言においてゴドの終助詞化がいっそう進んだことを物語る。

2.3　ゴドはどんな構文となじむか・なじまないか

既に述べたように、ゴドは、物事のありさまに驚いたり感動したりした際に――要するに感動表現において――用いられる。が、一口に感動表現と言っても「きれい！（形容動詞一語文）」「きれいな川！（連体修飾を伴う名詞文）」「川がきれい！（補語を伴う形容動詞文）」「きれいな川がある！（補語を伴う動詞文）」など、その構文はさまざまである。

この度の調査では、気仙沼市方言のゴドがどんな感動表現となじむか・なじまないかを調べた。調査文(1)(3)(4)(5)（次に再掲）による調査結果に基づき、報告する。

(1) きれいだゴドー。（形容動詞一語文＋ゴド）

(3) きれいな川だゴドー。（連体修飾を伴う名詞文＋ゴド）

(4) 川がきれいだゴドー。（補語を伴う形容動詞文＋ゴド）

(5) きれいな川があるゴドー。（補語を伴う動詞文＋ゴド）

ゴドの使用者69名のうち、調査文(1)(3)(4)(5)について「言う」と回答した話者は、それぞれ67名・65名・41名・25名であった。66名の話者（ゴドの使用者）を対象とした2006年調査の結果と並べ、表として示す。（表5）

表5　調査文(1)(3)(4)(5)のように言うか（2006年調査との対照）

	2006年	2024年
(1) 形容動詞一語文＋ゴド	54	67
(3) 連体修飾を伴う名詞文＋ゴド	60	65
(4) 補語を伴う形容動詞文＋ゴド	32	41
(5) 補語を伴う動詞文＋ゴド	20	25

注：表中の数値は「言う」と回答した人数

2024年調査では、「(1) 形容動詞一語文＋ゴド」について「言う」と回答した話者がもっとも多く、「(3) 連体修飾を伴う名詞文＋ゴド」について「言う」と回答した話者がわずかな差で次いだ（それぞれ67名と65名）。

一方、2006年調査を振りかえると、前者について「言う」と回答した話者よりも、後者について「言う」と回答した話者が多かった（それぞれ54名と60名）。けれども、これは誤差の範囲とみてよい（$\chi^2(1) = 2.32, p > .05$）。[注1]

要するに、連体修飾を伴う名詞文も形容動詞一語文も、ともにゴドとよくなじむ構文である。

その二者と比べると、「(4) 補語を伴う形容動詞文＋ゴド」について「言う」と回答した話者は、両調査を通じて少ない。「(5) 補語を伴う動詞文＋ゴド」について「言う」と回答した話者は、もっと少ない。補語を伴う形容動詞文はゴドとあまりなじまず、補語を伴う動詞文はもっとなじまないものと考えられる。

以上を踏まえ、それぞれの構文を、ゴドとよくなじむものからあまりなじまないものへと並べると、次のようになる。（図6）

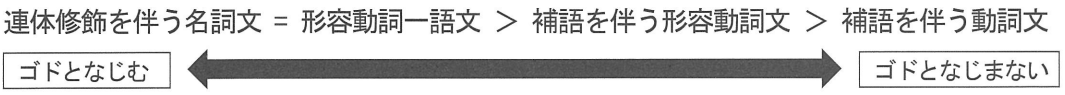


図6　ゴドとなじむ構文となじまない構文

注：「＝」は、その左右が同等にゴドとなじむ構文であることを表す。また「＞」は、その左がゴドとよりなじむ構文であることを表す。

このような傾向に世代間の違いはないか。高年層19名・中年層17名・若年層18名・少年層15名の回答を次の表に示す。表から見てとれるように、この傾向は全世代に通ずる。（表6）

表6　調査文(1)(3)(4)(5)のように言うか（世代別）

	高年層	中年層	若年層	少年層	合計
(1) 形容動詞一語文＋ゴド	17	17	18	15	67
(3) 連体修飾を伴う名詞文＋ゴド	17	15	18	15	65
(4) 補語を伴う形容動詞文＋ゴド	14	8	9	10	41
(5) 補語を伴う動詞文＋ゴド	6	7	6	6	25

注：表中の数値は「言う」と回答した人数

それでは、なぜゴドは、連体修飾を伴う名詞文や形容動詞一語文とよくなじみ、補語を伴う形容動詞文や動詞文とはなじまないのだろうか。この問題については、玉懸元（2012、2017）で考察した。ここでは、その要点を繰り返す。

山田孝雄は、日本語の文に「根本的に差別ある二種の発表形式」（山田孝雄1950、146ページより。ページ数は再刊による。以下同じ）を認めた。述体と喚体である。述体は「主格と賓格との対立が存し、述格が之を統合する」「二元性を有し、理性的の発表形式」であり、一方、喚体は「主

格述格の差別ない、一元的で、感情的の発表形式」である（以上、同146-147ページより要約）。それぞれの例を挙げる。

○ 松は緑なり。（述体）

○ 松は常磐木である。（述体）

○ 妙なる笛の音よ。（喚体）

○ あつぱれの武者振かな。（喚体）（以上、同146ページ・161ページより）

このような二者のうち「感情的の発表形式」である喚体は、まさしく感動表現にふさわしい。そして、その喚体（感動喚体）の組み立てを見れば、連体修飾を伴う名詞文の末に終助詞が投じられたものである。

さて、気仙沼市方言においてしばしば感動表現に用いられるゴドは、連体修飾を伴う名詞文とよくなじむのであった。それは、その構文が喚体の骨格そのものであるからに他ならない。

また、形容動詞一語文もゴドとよくなじむのであった。形容動詞一語文は、山田の定義に照らせば、喚体ではないだろう。しかし、補語を持たない一語文であることにおいて、典型的な述体とは距離がある。それゆえ、形容動詞一語文もまた、ゴドとよくなじむものと考えられる。

一方「川がきれいだ」のような文は、主格補語「川が」を持つ述体である。さらに「きれいな川がある」となれば、主格補語の他に与格補語なども持ち得る（例「あそこにきれいな川がある」）、いっそう述体らしい述体だ。「理性的の発表形式」である述体は、感動表現と折り合いが悪く、したがってゴドとなじみにくい。

なぜゴドは、連体修飾を伴う名詞文や形容動詞一語文とよくなじみ、補語を伴う形容動詞文や動詞文とはあまりなじまないか。その答えは、それぞれの構文が持つ喚体らしさ・述体らしさに求めることができる。（図7）

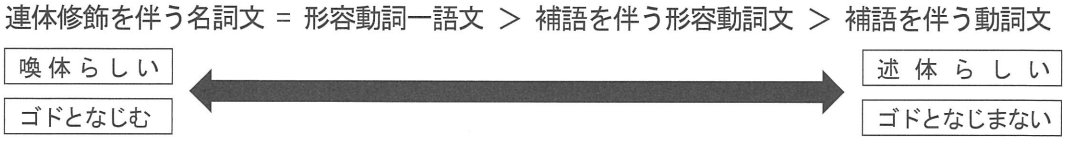


図7　ゴドとなじむ構文となじまない構文、それぞれの喚体らしさ・述体らしさ

注：「＝」は、その左右が同等にゴドとなじむ構文であることを表す。また「＞」は、その左がゴドとよりなじむ構文であることを表す。

補語を伴う形容動詞文や動詞文よりも、連体修飾を伴う名詞文や形容動詞一語文のほうが感動表現にふさわしい――筆者がこれまでに行った日本語方言の調査において、これに反する結果が得られたことはない。詳しくは別稿にゆずらなければならないが、この傾向は日本語を貫く類型論的な特徴と言えるのかもしれない。

3　まとめ

本稿では、2024年調査の結果に基づき、適宜2006年調査の結果と見比べながら、気仙沼市方言のゴドをめぐって次のようなことを述べた。

①ゴドを使うか・使わないか。

2006年調査と2024年調査の結果を見比べると、ゴドの不使用者が増えた。調査結果を世代別に観察してみると、ゴドの衰退は全世代を通じて緩やかに進んでいるものと察せられる。（以上2.1）

②ゴドは終止形に接続するか・連体形に接続するか。

2006年調査と2024年調査の結果を見比べると、連体形接続のみを用いる話者が一人も見られなくなった。話者それぞれの回答を生年順に観察すると、30代半ばの話者たちを限りとし、連体形接続は消滅に向かっている。このような調査結果は、気仙沼市方言においてゴドの終助詞化がいっそう進んだことを物語る。（以上2.2）

③ゴドはどんな構文となじむか・なじまないか。

2006年調査と2024年調査の結果を通じ、連体修飾を伴う名詞文や形容動詞一語文は、ともにゴドとよくなじむ構文である。一方、補語を伴う形容動詞文はゴドとあまりなじまず、補語を伴う動詞文はもっとなじまない。このような傾きは、各構文の喚体らしさ・述体らしさの反映と考えられる。（以上2.3）

注

1　クロス表を掲げるには紙幅の余裕がないが、「(1) 形容動詞一語文＋ゴド」を「言う54名、言わない12名」と、「(3) 連体修飾を伴う名詞文＋ゴド」を「言う60名、言わない6名」が実測値である。

文　献

生越直樹（2002）「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方―「きれいな花！」タイプの文を中心に」生越直樹編『対照言語学』東京大学出版会、pp.75-98

玉懸元（2012）「終助詞「ゴド」」東北大学方言研究センター編『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』文化庁委託事業報告書、pp.249-256

玉懸元（2017）「宮城県白石市方言の感動・希求表現「～ゴダ」―「今日暑いゴダ。冷たいもの飲みたいゴダ」」「国語学研究」刊行会編『国語学研究』第56集、pp.182-191

山田孝雄（1950）『日本文法学要論』角川書店（書肆心水より『山田国語学入門選書①日本文法学要論』として2009年に再刊）

「(サ) セテモラウ」への意識

加順　咲帆

1　調査の目的

本稿での配慮は、相手との対人関係を良好に保つことへの気遣いを言語的に表現することを指す。

本調査の目的は、「(サ) セテモラウ」や言いさし表現を用いた言語行動に対する気仙沼話者の捉え方の世代差、性差、また、「(サ) セテモラウ」、言いさし表現の捉え方においてどの要素が重要視されるかを明らかにすることである。本稿では特に受益表現「(サ) セテモラウ」について行った調査を取り上げる。

「(サ) セテモラウ」は、Brown&Levinson (1987) が示すポライトネス・ストラテジーの観点からは、「テモラウ」によって恩恵を受けることを明示するという点からネガティブ・ポライトネス・ストラテジー10「自分が借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを、オン・レコードで表せ」に該当し、配慮を表す表現だと言える。

しかし、話し手から差し出した配慮は必ずしも聞き手に配慮だと捉えられるとは限らない。配慮の捉え方には個人差、世代差、性差、さらには地域差が存在するためである。「(サ) セテモラウ」も同様に場合によっては配慮的に受け取られず、違和感を生じさせる場合がある。本調査では、そのような配慮の受け取り方の世代差、性差を求めることに着眼点がある。さらに、世代差や性差を求める調査を気仙沼話者を対象として行うことで、地域間の比較が可能なデータを収集できる。

また、本調査では、「(サ) セテモラウ」の捉え方の重点にも地域差があるのではないかという仮説から、話者の「(サ) セテモラウ」に対する意識を自由回答で問い、それを基に違和感が生じる要因を求めることを試みた。この方法により、話者が「(サ) セテモラウ」のどの要素を重要視し、意味を捉えているのか知ることができる。

2　調査の概略

調査は2024年8月7日～10日にかけて、表1に示すとおり、気仙沼市生え抜きの10～80代83名を対象に面接調査法によって行った。質問文の詳細は次節に示す。

表1　インフォーマントの内訳

	男性	女性	総計
高年層 60～80代	11	11	22
中年層 40～50代	7	14	21
若年層 20～30代	6	14	20
少年層 10代	10	10	20
総計	34	49	83

3　(A) 受益表現「(サ) セテモラウ」の調査

3.1　先行研究

本調査では、自分が相手に恩恵を与える立場であるにもかかわらず「(サ) セテモラウ」を用

いる場面を扱う。その「(サ) セテモラウ」の例は『方言文法全国地図 6』第 320 図に見られる。当地図は目上の人にひじょうにていねいに「その荷物は私が持ちましょう」と言うときの形式を示したものである。「持たせてもらう」は近畿にまとまって見られる。さらに、近畿が「持たせてもらう」を使うのに対して、東北は恩恵を与えることを表示する「テヤル」を用いて「持ってやる」と言うことが地図からわかる (小林・澤村 2014)。ここに近畿と東北の対比が存在するのである。

受益表現「(サ) セテモラウ」の違和感の要因の把握のために、「(サ) セテモラウ」の敬語形である「(サ) セテイタダク」を扱う椎名 (2021) を挙げる。椎名 (2021) では「(サ) セテイタダク」の受容度を左右する意味論的要因に「使役性」「恩恵性」「必須性」を設定した。「使役性」は聞き手の働きかけ・許可・許容・同意が必要かどうか、「恩恵性」は聞き手または話し手にとって利益 (事実・気持ち) があるかどうか、「必須性」は聞き手の存在・関与が必要不可欠かどうかと定義される。また、「恩恵性」は恩恵を受けるのが話し手か聞き手かで区別される。椎名 (2021) の調査では「させていただく」文に違和感を与える要因として「必須性」、「使役性」の順に効果が強く、これらの要素が無いことが違和感の要因になることが明らかになった。一方、「恩恵性」はほとんど効果を及ぼさないことがわかった。また、他の要因として年齢層、会話的役割も影響を与えるという。これらの「(サ) セテイタダク」の機能は、「(サ) セテモラウ」の違和感を考える視点として援用が可能だと考えられる。一方、椎名 (2021) は、上述の「持たせてもらう」のような「使役性」「恩恵性 (聞き手)」があり、「恩恵性 (話し手)」「必須性」が無い場合を扱っておらず、不十分な点がある。

3.2 質問文

質問文は以下のとおりに設定した。

これから、いくつかの場面でのやり取りをお示しします。その中のことばについて、あなたご自身がどうお感じになるか教えてください。

A. まず、ゴミ捨てを代わってあげるという場面についてお聞きします。

(1) あなたと A さんは世間話をする程度の友人同士です。今日、ちょっとした会議があり、その片づけで A さんはゴミ捨てを任されました。しかし、A さんは困った様子です。そこで次のような会話をします。

あなた「どうしたの？」

A さん「今日、親戚のお見舞いに行く用があって、早く帰りたいんだ。」

あなた「そうなんだ。じゃあ代わりに私がゴミ捨てやらせてもらうよ。」

今の「ゴミ捨てやらせてもらうよ」という言い方について、どのように感じますか。

自然 ／ やや自然 ／ やや不自然 ／ 不自然

そのように思うのはなぜですか。自由にお答えください。

(2) 今の質問と同じ場面で、ゴミ捨てを代わってあげるときに (ア)「代わりに私がゴミ捨てやらせてもらうよ。」と言うのと (イ)「代わりに私がゴミ捨てやるよ。」と言うのとでは、どちら

が聞いた相手が感じがいいと思う言い方だと思いますか。

ア ／ イ

そのように思うのはなぜですか。自由にお答えください。

本調査では恩恵を受けるのが聞き手である場面を設定した。これは椎名（2021）における「使役性」「恩恵性（聞き手）」があり、「恩恵性（話し手）」「必須性」が無い場面設定である。(1) では上記の場面での「(サ) セテモラウ」に対する自然さの評価を問い、(2) は「(サ) セテモラウ」を伴わない形式「やるよ」と比較したときの評価を問う。本稿では (1) の調査結果を述べる。

3.3 調査結果

まず、世代差について述べる。表 2 は (1) への回答数を世代別に示したもの、図 1 は表 2 の数値を百分率にして示したものである。以下、図中の値は小数点第 2 位以下を四捨五入して示す。また、項目「その他」の内実は「やや自然とやや不自然の間」という回答である。

表 2　世代別 (1) への回答

	自然	やや自然	やや不自然	不自然	その他	総計
高年層	2	2	5	13	0	22
中年層	1	0	13	7	0	21
若年層	2	1	8	8	1	20
少年層	3	3	10	4	0	20
総計	8	6	36	32	1	83

図 1　世代別 (1) への回答の割合

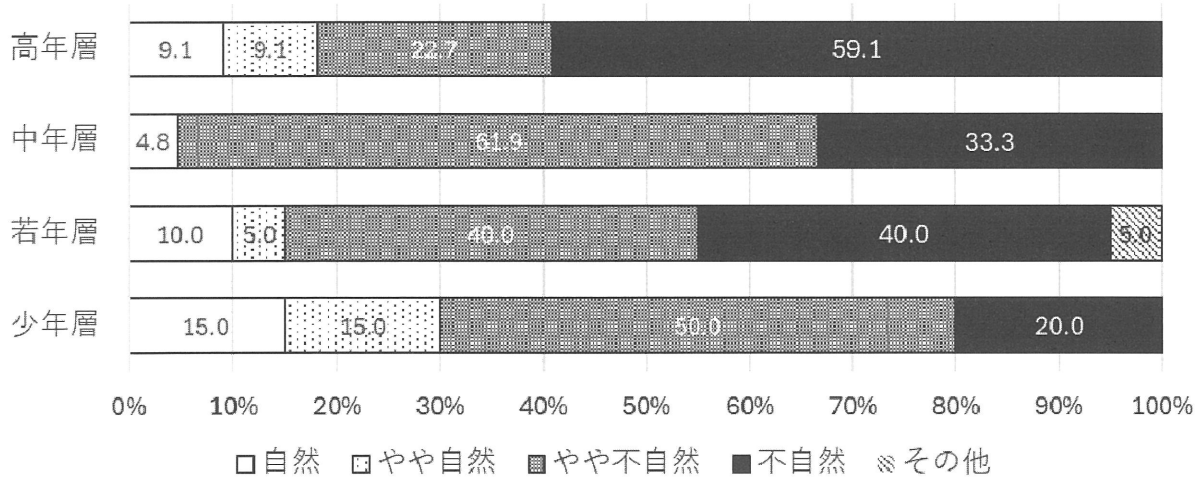


図 1 より、「やや不自然」と「不自然」を合計したときの割合が、中年層＞高年層＞若年層＞少年層の順で大きいことがわかる。予想では世代順に従って高年層＞中年層＞若年層＞少年層の順で

「やや不自然」と「不自然」を合計したときの割合が大きくなると考えたが、予想に反して高年層と中年層が逆転する結果となった。このことには留意しつつまとめると、中・高年層＞若年層＞少年層の順で許容度が下がるという結果になった。また、「不自然」の回答率は高年層で最も大きい。高年層と中年層を比較したとき、不自然さを感じる人は中年層のほうが多いが、高年層の話者のほうがより厳しく不自然だという違和感を指摘することが言える。

次に、性差について述べる。表 3 は（1）への回答を男女別に示したもの、図 2 は表 3 の値を百分率で示したものである。

表 3　男女別（1）への回答

	自然	やや自然	やや不自然	不自然	その他	総計
男性	3	3	12	15	1	34
女性	5	3	24	17	0	49
総計	8	6	36	32	1	83

図 2　男女別（1）への回答の割合

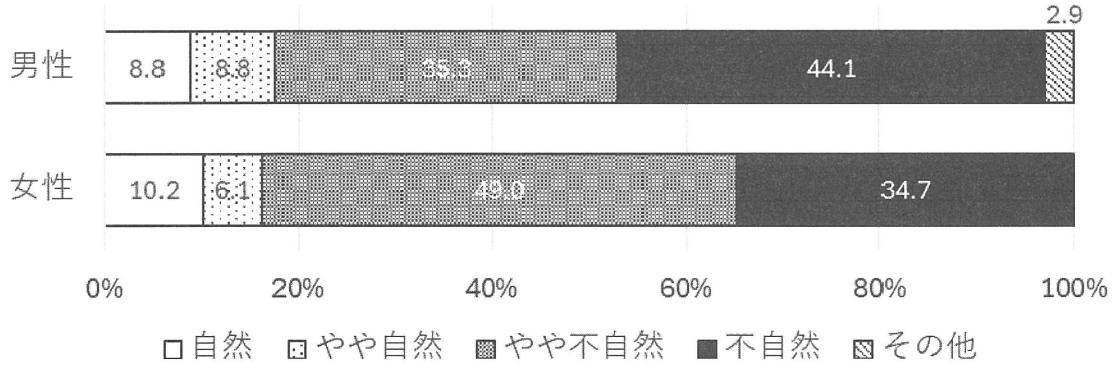


図 2 より、「自然」「やや自然」と「やや不自然」「不自然」の対比には性差が無いことがわかった。しかし、「不自然」の回答は男性でより多く、より厳しく不自然だという違和感を指摘するのは男性であることが言える。

最後に、それぞれの回答について、なぜそのように感じるのか自由回答を求めた結果を示す。これにより「（サ）セテモラウ」をどのように捉えているのか、そして、どの点が違和感の要因となっているのかを知ることができる。得られた回答のうち、複数人から同様に得られた「「（サ）セテモラウ」に対する感じ方」とその回答数を表 4 に示す。

表4　「(サ) セテモラウ」に対する感じ方

No.	話者の回答	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
1	そのように言わない	0	5	3	8	16
2	授受関係が適切でない	1	2	3	2	8
3	恩着せがましい	3	1	3	0	7
4	親しくない仲の言い方だ	5	0	0	1	6
5	偉そう、上から目線だ	2	1	2	1	6
6	下手に出る言い方だ	0	3	0	2	5
7	回りくどい、長い	0	2	1	1	4
8	丁寧だ	2	1	1	0	4
9	嫌々やるようだ	2	0	0	0	2
10	正しい言い方だ	0	1	1	0	2
11	総計	15	16	14	15	60

表4では回答数の多い順に回答を並べた。以下では、回答数の上位3件について述べたい。

全体で最も回答数が多かったのは「そのように言わない」であった。気仙沼話者にとって恩恵を受けるのが相手である場面での「(サ) セテモラウ」は馴染みのないものであることがわかる。

次に多いのは「授受関係が適切でない」であった。この項目に該当するのは「やってあげるから「もらう」がしっくりこない」「「もらう」んじゃなくて「あげる」」という回答や「(「やらせてもらう」ではなく)「やってあげるよ」が自然」「「やってけっから」と言う」という授益表現との比較をした回答である。『方言文法全国地図6』第320図や小林・澤村 (2014) が示すとおり、気仙沼話者にとっては相手に恩恵がある行為をする場合、その場面に意味的に沿う授益表現「テヤル」「テアゲル」を用いることが自然なようである。また、それだけではなく、場面に沿わない受益表現は違和感になるのであり、ここから場面に意味的に沿う形式を選択することへの規範意識が見られる。

次に多いのは「恩着せがましい」であった。この回答には椎名 (2021) が指摘するところの「使役性」が関わっていると考えられる。本調査の場面設定はAが困っているところに「あなた」がゴミ捨てを代わると申し出るものであった。ここでのゴミ捨てを代わるという申し出は話し手である「あなた」の自発的な働きかけである。しかし、「(サ) セテモラウ」を用いると、その「使役性」により聞き手であるAはゴミ捨てを代わることに許可や許容の働きかけを求められたように感じてしまう。この働きかける主体の逆転により、ゴミ捨てを代わるという行為があたかも聞き手の働きかけのようになってしまい、恩着せがましさが生じたと考えられる。ここには、働きかけの主体と客体は場面どおりでなければならないという規範意識も読み取れる。また、表4におけるNo.9「嫌々やるようだ」もまた、働きかける主体が逆転することで、申し出を行った側の主体性が薄れ、ゴミ捨てを代わることに対する消極性として認識されたことによる回答だと考えられる。

また、今回の調査では、話し手である「あなた」がゴミ捨てをするという行為に聞き手であるAの存在・関与は必要ではないという必須性に関する指摘は無かった。このことから必須性の有無に対する違和感は話者の意識に上りにくいと言える。

以上をまとめ、椎名（2021）と関連させて「(サ) セテモラウ」について述べると、(3) ～ (5) のようになる。

(3)「必須性」は椎名（2021）では違和感の要因として最も効果が強いとされるが、話者の意識には違和感として上らない。

(4)「使役性」は椎名（2021）と同様に話者の意識でも指摘が得られた。しかし、「使役性」が発揮されるゆえに、恩着せがましさや行為への消極性が生じ、それが違和感となる。

(5)「恩恵性」は椎名（2021）では違和感にほぼ影響を及ぼさないとされるが、話者の意識において違和感を抱く要因として挙げられやすい。

そして、(3) ～ (5) と、本調査で扱った恩恵を受けるのが聞き手である場面、すなわち「使役性」「恩恵性（聞き手）」があり、「恩恵性（話し手）」「必須性」が無い場面設定が椎名（2021）で扱われなかったことを考えると、「使役性」「恩恵性」「必須性」が違和感に与える影響の効果の強さが場面によって変わる可能性があることを指摘できる。

4　まとめと今後の課題

以上、聞き手に恩恵がある場面での受益表現「(サ) セテモラウ」を用いた言語行動に対する気仙沼話者の捉え方の世代差、性差、また、「(サ) セテモラウ」の捉え方において重要視される要素を分析してきた。その結果を以下にまとめる。

まず、世代差について、当場面の「(サ) セテモラウ」を「やや不自然」「不自然」に感じる人の割合は中高年層＞若年層＞少年層の順で大きい。また、高年層は全世代の中で「不自然」に感じる割合最も大きく、当場面の「(サ) セテモラウ」に厳しい評価を下した。

次に、性差について、「自然」「やや自然」と「やや不自然」「不自然」の対比に性差が無い。ただし、「不自然」に感じる人の割合は男性の方が大きく、男性がより当場面の「(サ) セテモラウ」に対して厳しい評価を下した。

最後に、「(サ) セテモラウ」の捉え方において重要視される要素について椎名（2021）に依拠して述べると、話者の意識で違和感に影響を与える要素として効果が高いと考えられるのは「恩恵性」で、次に「使役性」であった。また、「必須性」は話者の意識には上らなかった。この結果から使役性」「恩恵性」「必須性」が違和感に与える影響の効果の強さが場面によって変わる可能性があることを指摘した。

本調査では1場面、1地域の結果しか得られなかったが、場面や調査対象とする地域を拡充し研究を進めたい。特に、聞き手に恩恵がある場面での受益表現「(サ) セテモラウ」は近畿で見られて

いることから、近畿との対照が今後の課題である。

文　献

Brown Penelope. and Stephen C Levinson.（1987）*Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge: Cambridge University Press.（ブラウン・ペネロピ and スティーブン・C・レヴィンソン　田中典子監訳・斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野嘉憲・山下早代子訳（2011）『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社）

国立国語研究所（2006）『方言文法全国地図 6』国立印刷局

小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波書店

椎名美智（2019）『「させていただく」の語用論―人はなぜ使いたくなるのか―』ひつじ書房

感動詞「アップ」

坂喜　美佳

1　調査目的

東北大学方言研究センターが 2008 年度に実施した「感動詞の全国調査」では、幼児を叱る場面で北海道から北関東にかけて「アップ」という感動詞の使用が確認されている（図 1）。この感動詞「アップ」は、共通語の感動詞「メッ」と同じく大人に対しては使用されない語である。このような感動詞「アップ」の存在は先行研究で指摘されているものの、その使用実態や言語形式、機能については十分な調査が行われておらず、詳細が明らかになっていない。

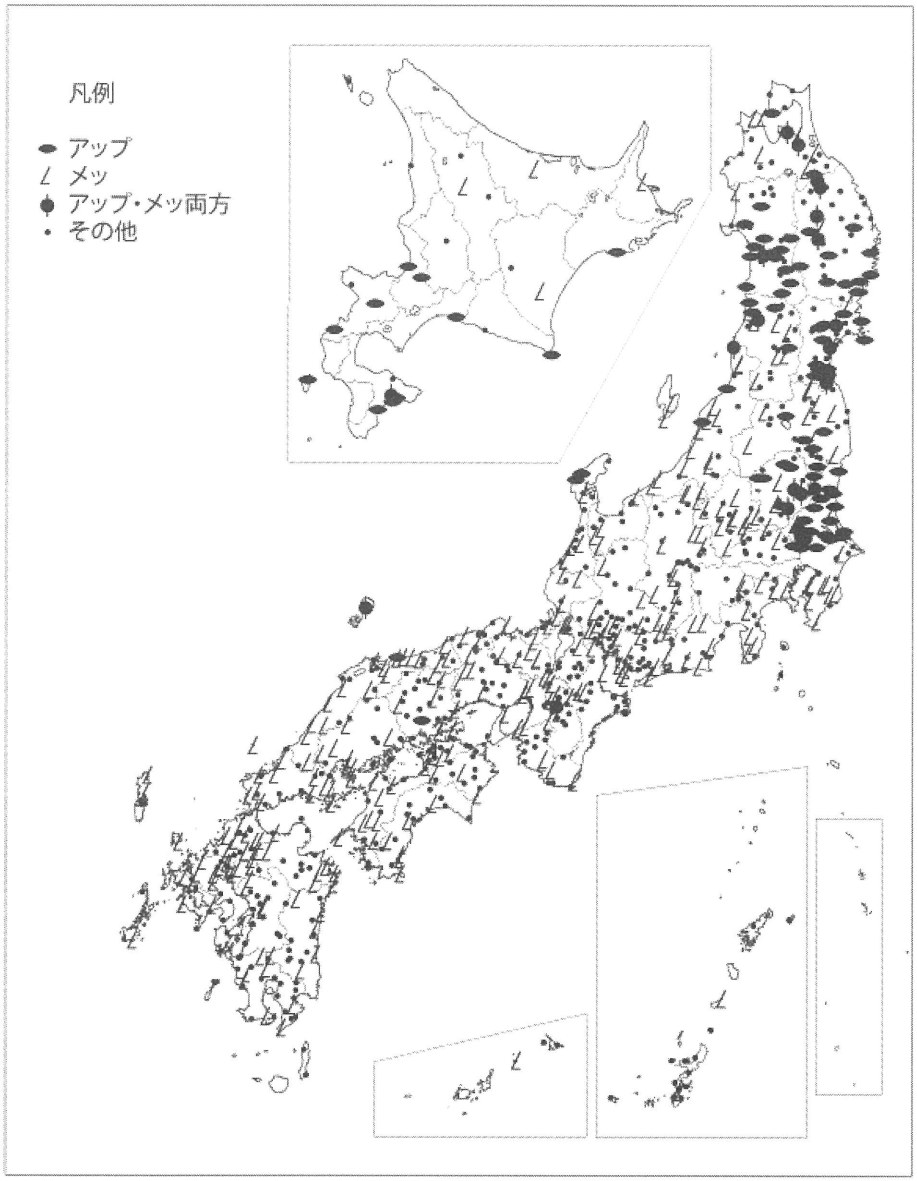


図 1　「メッ」と「アップ」の分布（坂喜 2022 より）

本調査は、気仙沼市における感動詞「アップ」の包括的な解明を目指して行ったものである。

具体的には、「アップ」の使用経験の有無を確認し、次に、形態的特徴について把握する。さらに、この語がどのような場面で、どのような機能を果たしているのかを明らかにする。以下は、このような調査・分析で、気仙沼市における感動詞「アップ」の解明を目指した結果を報告するものである。

2　調査項目

本調査では、「アップ」という語の使用実態を明らかにするため、以下のような項目について聞き取りを行った。まず、この語の認知および使用経験（言ったことがある／言われたことがある／聞いたことがある）の有無を確認した。使用経験のあるインフォーマントに対しては、どのような形態で使用するかについても確認した。また、具体的な使用場面とその状況、聞き手（「アップ」と言う相手）は誰かとその年齢、話し手との関係性について尋ねた。さらに、発話時の身体動作や表情などの非言語行動、また聞き手の反応や姿勢についても調査項目に含めた。

3　調査結果と分析

3.1 使用経験

気仙沼市のインフォーマント83名を対象とした調査の結果、「アップ」という語の使用経験について、以下のような実態が明らかになった。使用経験については、インフォーマント全体では「言ったことがある」が47名（56.6%）と最も多く、次いで「聞いたことがある」が17名（20.5%）、「言われたことがある」が12名（14.5%）となっている。一方、「聞いたこともない」と回答したのは7名（8.4%）であった。「言ったことがある」と回答したインフォーマントは全員が「言われたことがある」「聞いたことがある」とも回答し、「言われたことがある」と回答したインフォーマントは全員が「聞いたことがある」とも回答している。この結果から、「アップ」は気仙沼市において高い認知度と一定の使用頻度を持つことが分かる。

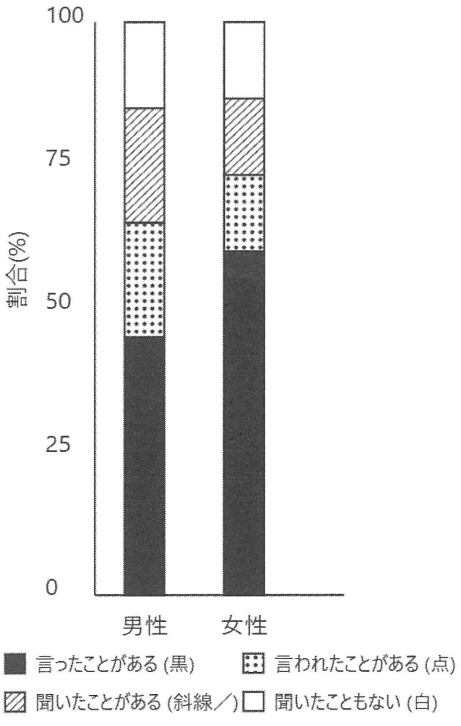


図2　男女別使用経験

図2に示すように、男女別に見ると、「言ったことがある」は男性34名のうち16名（47.1%）、女性49名のうち31名（63.3%）となっており、女性の方が使用頻度が高い傾向が確認された。一方、それ以外の回答では男女差は比較的小さく、男性のうち「聞いたことがある」は7名（20.6%）、「言われたことがある」は7名（20.6%）、「聞いたこともない」は4名（11.8%）となっており、女性のうち「聞いたことがある」は10名（20.4%）、「言われたことがある」は5名（10.2%）、「聞いたこともない」は3名（6.1%）となっている。この「言ったことがある」という回答の男女差は、「アップ」が幼児を対象とした語である点から、育児場面での女性の関与が多いことと関連している可能性がある。

次に図3に示すように、インフォーマントの年齢層別に見ると、40代以上では全員が「言ったことがある」「聞いたことがある」のどちらかを回答している。一方、10-30代では回答が分散していた。「言われたことがある」という

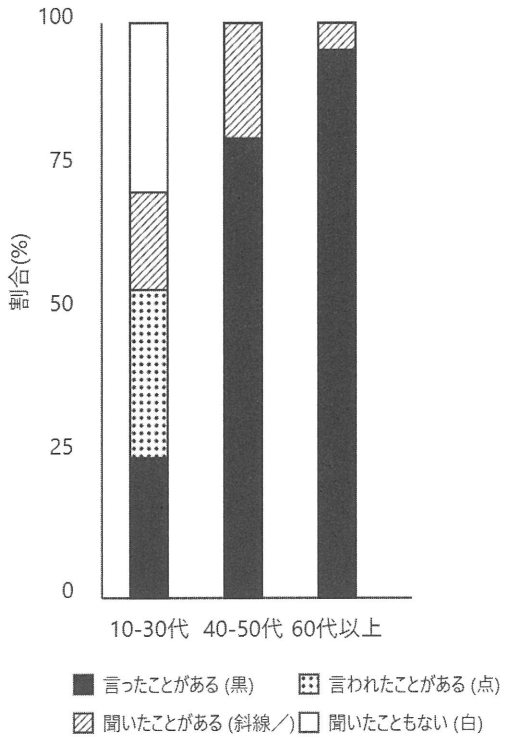


図 3　年齢層別使用経験

回答は、この 10-30 代の若年層に集中しており、40 代以上では見られなかった。「言ったことがある」という回答に着目すると、60 代以上では 93.8%であるのに対し、10-30 代では 24.4%と顕著に低下している。この結果は、世代間で「アップ」の使用頻度が急激に変化していることを示しており、特に若年層において使用が減少している点が注目される。

3.2 形態的特徴

今回の調査で得られた形態は 38 種類（異なり語数）、総出現数は 169 例（延べ語数）である。「アプッ」は、50 例と最も多く使用されており、これが気仙沼市での基本的な実現形と考えることができる。次いで「アップ」(25 例）が多く、「アップダヨ」(11 例)、「アプー」(11 例)、「アプダヨ」(9 例）と続く。また、「アップップ」「アップー」「アプ」がそれぞれ 5 例ずつ確認された。「アプッ」が一番多く使用されてはいるが、これは末尾に閉鎖音を伴った実現形と考えることができ、形態を整理するにあたっては、感動詞としての基本形は「アプ」であるとする。

回答された全ての実現形は、以下のような特徴によって分類することができる。

①音声的操作

基本形形式：「アプ」
促音化単独形式：「アプッ」「アップ」「アップッ」
長音化単独形式：「アプー」
濁音化単独形式：「アブ」
重音化単独形式：「アプアプ」
促音化＋長音化形式：「アップー」
促音化＋濁音化形式：「アブッ」
促音化＋重音化形式：「アップップ」「アップップノプー」

②複合形式

ダヨ類：「アプダヨ」「アップダヨ」「アップダヨー」「アプダヨー」「アブダヨ」「アップダヨネ」
「アプーダヨー」「アプナンダヨ」「アップップダヨー」「アップップーダヨ」
デショ類：「アプデショ」「アップデショ」「アプデショー」

ヨ類：「アプヨ」「アプヨー」「アップヨ」
スル類：「アップスル」「アップスルヨー」「アップシテダメヨ」
ダガラ類：「アプダガラ」「アップダガラ」「アップップダカラネ」
ダ・ダゾ類：「アプダ」「アプダゾ」「アップダゾ」
ネ類：「アップネ」

以上のように基本形「アプ」に対して様々な操作が加えられることで、叱りの程度や場面に応じた使い分けがなされている。

まず、①音声的操作による実現形として、促音化、長音化、濁音化がある。また、基本形を重複させた形式（重音化）も見られる。これらの音声的操作は、叱りの強さや緊急性を表現する機能を持つと考えられる。

次に、②終助詞などの要素との複合形式が挙げられる。最も多く観察されるのは、ダヨ類である。この他、デショ類、ヨ類、ダ・ダゾ類など、様々な終助詞の後接が確認された。これらの形式は、叱りの意図を明示的に伝える機能や、叱りの強さを調整する機能を持つと考えられる。また、動詞的な表現（アップスル、アップスルヨー、アップシテダメヨ）も観察され、これは話し手の「叱る行為」もしくは聞き手の「叱られるような行為」を表現する形式として機能している。

さらに特徴的なのは、複数の操作が組み合わされた形式の存在である。例えば、重音化と長音化を組み合わせた形式（アップップノプー）や、重音化に終助詞が後接した形式（アップップダヨー）などが確認された。②複合形式は、多くの実現形が音声的操作も加わったものである。これらの複数の操作が組み合わされた形式は、より複雑な感情や意図の伝達を可能にしていると考えられる。

このように、「アップ」は基本形に様々な操作を加えることで豊富なバリエーションを持ち、叱りの場面や強さ、インフォーマントの意図に応じて使い分けられる。これにより、幼児に対する細やかな感情伝達が可能となる。場面との関連については後述する。

3.3 非言語行動との結びつき

今回の調査では、発話時の身体動作や表情などの非言語行動、また聞き手の反応や姿勢についても尋ねている。その結果、「アップ」は、その実現形のバリエーションに関わらず、発話時に特徴的な非言語行動を伴うことが明らかになった。「アップ」という語に何らかの非言語行動を伴うインフォーマントは、「聞いたこともない」と回答した7名を除く76名中71名（93.4%）にのぼり、非言語行動を伴わないインフォーマントは5名（6.6%）にとどまる。このことから、「アップ」は単なる音声表現ではなく、非言語行動と強く結びついたコミュニケーションであることが分かる。これらの非言語行動は「頬を膨らます」「しかめ面」「手指の動作」の3つに大別され、単独または組み合わせて用いられる。非言語行動の種類と組み合わせについて、その数を示すと次のようになる。

A．単独の動作

頬を膨らます：25 名（32.9%）、しかめ面：10 名（13.2%）、手指の動作：8 名（10.5%）

B．2 つの動作の組み合わせ

頬を膨らます＋しかめ面：12 名（15.8%）、頬を膨らます＋手指の動作：7 名（9.2%）

しかめ面＋手指の動作：2 名（2.6%）

C．3 つの動作の組み合わせ

頬を膨らます＋しかめ面＋手指の動作：4 名（5.3%）

D．その他の動作：3 名（3.9%）

E．非言語行動なし：5 名（6.6%）

まず、表情に関する特徴として、「頬を膨らます」という動作が最も顕著である。約 6 割（76 名中 48 名、63.2%）のインフォーマントが、「頬を膨らます」動作を行うと回答している。この動作は音声と密接に結びついており、先述の形態的特徴では、気仙沼で一番多い「アプッ」は「末尾に閉鎖音を伴った実現形」とだけ述べたが、実際には促音「ッ」は頬を膨らまし、両唇で閉鎖を作っているということになる。また、「しかめ面をする」（28 名、36.8%）といった、叱責の意図を示す表情の表現も観察された。「しかめ面」には、「眉間にしわをよせる」「険しい顔をする」などの回答も含んでいる。

次に、「手指の動作」（21 名、27.6%）については、いくつかのパターンが確認された。「指さし」や「人差し指を立てる」といった指示的な動作、「手を出して制止する」「子どもの手を抑えて制止する」といった接触を伴う制止動作が主なものである。特に制止動作は、危険回避の場面で多く観察され、言語表現と同時に行われることで、即座の行動制止を促す機能を果たしている。

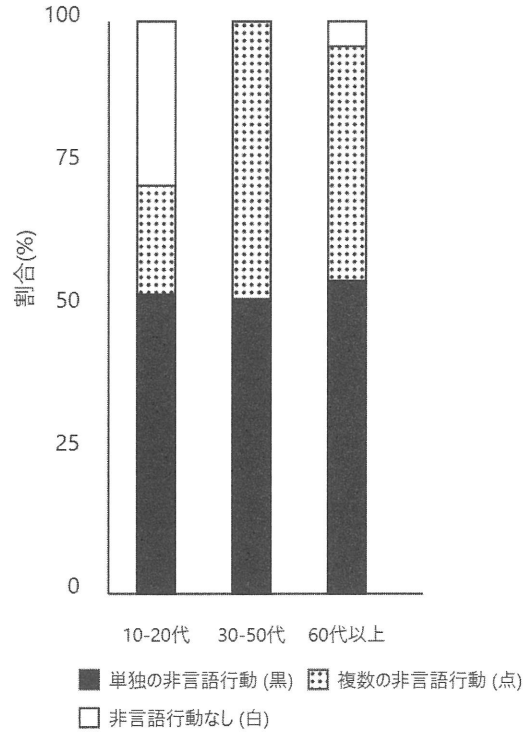


図4　年齢層と非言語行動

「その他の動作」としては、「唇を震わせる」「目をじっと見て言う」「あきれ顔をする」が回答されている。聞き手の反応や姿勢については、「身体を話し手に向ける」（17 名）、「目を合わせる」（8 名）、「顔を向ける」（5 名）といった、相手との対面性を確保する姿勢が基本となっていた。ただし、「場合による」「違う方向を向いていても言える」といった報告もあり、状況に応じて柔軟な対応がなされていることがわかる。特に「緊急性が高いときは目を合わせないこともある」という報告からは、場面の切迫度に応じて非言語行動が調整されていることが示唆される。

注目すべきは、これらの非言語行動とインフォーマ

ントの年代に相関が見られる点である。30 代以上では単独の非言語行動のみの使用と複数の非言語行動を組み合わせての使用が半々で拮抗しているのに対し、10-20 代では複数の組み合わせでの使用が少なく、非言語行動を伴わない使用も多くなっている。これは、この語の使用に関する世代間の差を反映していると考えられる。

以上のように、「アップ」という語は、非言語行動を伴うことで、より効果的なコミュニケーションとして機能していることが明らかになった。これらの非言語行動は、場面や意図に応じて適切に選択・組み合わせられており、特に幼児とのコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていると言える。

3.4 聞き手の年齢と使用場面

「アップ」を使用可能な相手の年齢に関して、「聞いたこともない」と回答した 7 名を除く 76 名のインフォーマントから回答を得た。インフォーマント全員が幅を持った年齢の回答をしている。全体的な年齢範囲は 0 歳から 15 歳までとなっているが、そのうち就学前の幼児を対象とする回答が大半を占めている。

具体的な対象年齢の分布を見ると、「0〜2 歳」が 12 名（15.8%）と最も多く、次いで「0〜6 歳」が 11 名（14.5%）、「0〜3 歳」が 9 名（11.8%）となっている。これら上位 3 つの回答で全体の 42.1% を占めており、いずれも 0 歳から開始される年齢範囲となっている。

開始年齢のみに着目すると、0 歳から開始される回答が 48 名（63.2%）、1 歳から開始される回答が 17 名（22.4%）であり、この 2 つで全体の約 8.5 割を占めている。一方、2 歳以降から開始される回答は合計でも 11 名（14.5%）にとどまる。終了年齢については、2 歳までが 16 名（21.1%）、3 歳までが 14 名（18.4%）、6 歳までが 20 名（26.3%）となっており、6 歳以下を終了年齢とする回答が全体の約 6.5 割を占めている。

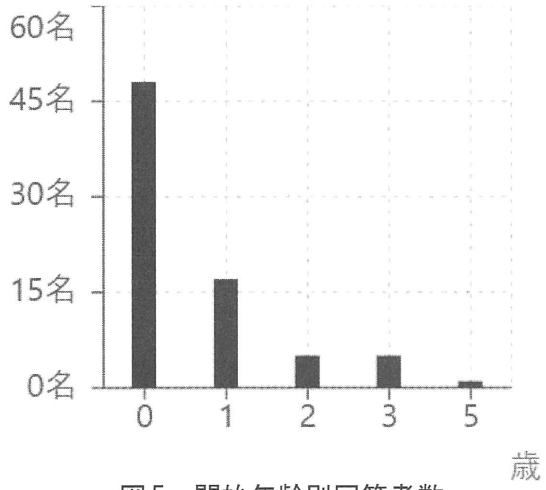


図 5　開始年齢別回答者数

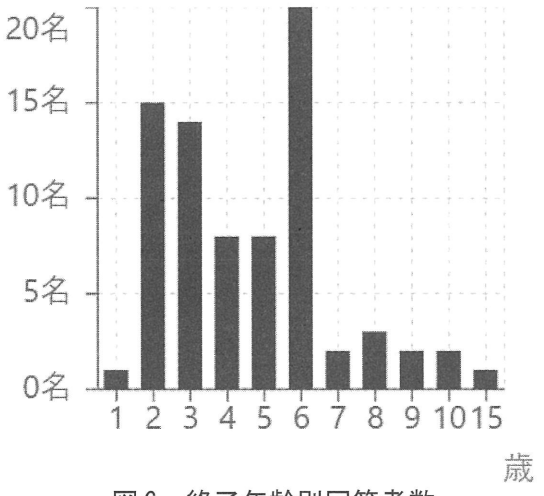


図 6　終了年齢別回答者数

このように、「アップ」は主に 0〜6 歳の子どもを対象として使用される表現であることが明らか

となった。「言葉が通じない子に対して」「幼稚園に入ると通用しない」という回答の補足が複数見られたが、これは、言語的なコミュニケーションが十分に成立しない年齢の子どもに対して、この語が効果的に機能していることを示唆しており、実際は6歳よりも年齢が下がるかもしれない。

なお、対象年齢の分布にはインフォーマントの年代による特徴的な傾向も見られた。まず、0〜2歳を含む対象年齢を回答した割合を年代別に見ると、40代・80代以上で50.0%、50代で30.0%と比較的高い割合を示しているのに対し、10代では7.1%と顕著に低くなっている。また、対象年齢の範囲設定にも、インフォーマントの年代による違いが見られる。40代・50代では0〜2歳への使用が特に多く（40代：40.0%、50代：30.0%）、比較的限定された年齢層への使用が報告されている。一方、10代では0〜4歳（28.6%）を最多としながらも、5〜15歳といった広い年齢範囲の回答も見られ、対象年齢の認識にばらつきが大きい。やはり「アップ」を自身が使用することはないインフォーマントは、聞き手の年齢に関する認知的精度が低いと言える。このことからも、実際の聞き手の年齢は0〜6歳よりも幅が狭まる可能性がある。

次に、具体的な使用場面に関しても自由回答で尋ねたので見ていくと、

ａ．軽度の叱責場面（65.0%）
「いたずらをしたとき」「子どもが言うことを聞かないとき」「飲み物をこぼしたとき」など
ｂ．危険回避の場面（14.5%）
「危ないものを触りそうになったとき」「行ってはだめなところに行ったとき」など
ｃ．その他の場面（20.5%）
「怒ったふりをして笑わせるとき」「からかって子ども扱いするとき」など

以上のようになっている。これらの具体的な使用場面から、「アップ」の使用には以下のような特徴的なパターンが見られる。まず、この語は深刻な叱責場面ではなく、主に軽い叱責や穏やかな制止を必要とする場面で用いられる。「笑って許せるレベル」「優しく諭す」といった補足が多く見られることから、叱責の程度が軽いことが「アップ」の大きな特徴といえる。また「すごく怒るわけではなく」「愛情がある」といった表現も頻出することから、子どもへの愛情表現を含んだ形での使用が一般的であることが分かる。

さらに、危険回避の場面では、即座の行動停止を求める意図をもって使用される。ただし、本当に深刻な危険の場合は「メッ」や「コラッ」などの他の表現が選択される傾向にあり、「アップ」は比較的軽度の危険に対して用いられることが多い。

その他の場面にある「からかって子ども扱いするとき」は、聞き手の年齢に関わらず、ふざけて言う場面であり、今回の調査では「小学生くらいの子ども」「成人した大人」が聞き手だという回答を得た。主に小学生以下の子どもに対して用いることを利用したからかいであると捉えられる。

このように、「アップ」は言語発達途上の幼児に対して、軽度の叱責場面で用いられる表現として機能していることが明らかとなった。

4　考察

「アップ」は、言葉でのコミュニケーションがまだ難しい小さな子どもに対して、子育ての中で使われている。この語の面白さは、言い方や表情、しぐさを組み合わせることで、様々な気持ちを伝えられる点にある。例えば、危ないものに手を伸ばした子どもに「アップ」と短く言うときは、手を止める動作と一緒に使い、緊急性を伝える。一方、軽いいたずらのときは「アップダヨー」と言いながら、頬を膨らませ優しく諭す。このように、場面や伝えたい気持ちに応じて、言語での表現の仕方や表情、身体の動きを細かく変えて用いる表現なのである。

「アップ」の使われ方の変化は、方言がどのように受け継がれていくのかを考える上でも、興味深い。高年層では日常的に使用されていた「アップ」が、若年層では「聞いたことはあるけれど、自分では使わない」という形に変化している。この背景には、子育ての環境や社会的な変化が影響を与えていると考えられる。昔は祖父母や兄弟をはじめ家族や地域社会が育児に深く関与していたため、家庭内で地域方言を使用する機会が多かった。しかし、近年は共働き家庭の増加により、早期から保育園や幼稚園に通う子どもが増え、共通語を使用する機会が増加している。数名のインフォーマントからは「失礼になるから自分の子以外には使わない」と補足があった。この変化は、地域方言の継承と変容が現代の社会環境に大きく左右されていることを示している。

5　まとめと今後の課題

本稿では、気仙沼市における感動詞「アップ」についての調査・分析を報告した。調査結果から、「アップ」は0〜6歳の幼児、特に0〜2歳児を対象とした軽度の叱責表現として機能していることが明らかとなった。また、多様な形態と非言語行動の組み合わせにより、精緻な感情伝達が可能であることも確認された。

今後の研究課題として、形態・非言語行動・場面の相関を分析することが挙げられる。また、「メッ」「コラッ」等の他地域における類似表現との対照、インフォーマントの育児経験・家族構成との関連性の検討も行う必要がある。さらに、育児語全般における位置づけの解明や、使用者の減少が進む中で「アップ」がもつ社会言語学的な意義についても、引き続き考察が求められる。

文　献

小林隆・澤村美幸（2017）「第2章 感動詞の方言学」小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎『方言学の未来をひらく—オノマトペ・感動詞・談話・言語行動—』ひつじ書房

坂喜美佳（2022）「人を叱るときの感動詞」小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』ひつじ書房

舩木礼子（2009）「感動詞」国立国語研究所全国方言調査委員会編『方言文法調査ガイドブック3』国立国語研究所